

# 企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示 における社会的意義と広報的利点

駒橋 恵子

はじめに

博物館という空間はコミュニケーションの場であり、メッセージを伝えるメディアである、という考え方は、多くの研究者が指摘している。光岡（2010 他）はミュージアムの空間性に着目し、その空間はメディアの複合体（メディアコンプレックス）であり、「多様なコミュニケーションの関係性の総体として描き出すことが可能」であるとした。村田（2014）は、「ミュージアムを訪れる来館者は、そのメッセージ性を受け止め、解釈する『受け手』である。その意味においてミュージアムとは、送り手と受け手のコミュニケーションを媒介するメディアである」と述べている。

本論文は、企業博物館のメッセージ性に着目し、自社の歴史的技術や創業者精神について、ストーリー性を持った視覚的な展示を行っている館について、個別の具体的な展示方法を分析し、展示の社会的意義と広報的利点を考察するものである。空間の展示方法も分析対象なので、若干の写真を資料として例示した。全ての写真は、調査に訪れた際に筆者が自分で撮影したものである。

## 1. 企業博物館に関する理論的考察

### 1-1. 企業博物館の意義と分類

最初に、企業博物館は「博物館（＝ミュージアム）」なのか、という点を確認しておきたい。国際博物館会議（ICOM）の定義によると、ミュージアムとは「社会とその発展に貢献し、研究・教育・楽しみの目的で人間とその環境に関する物質資料を取得、保存、研究、伝達、展示する公共の非営利常設機関」である。残念ながら、企業博物館の多くは、私企業の展示物であり、公共性が低いとみなされ、正式な「博物館」と認められてこなかった。

元シカゴ科学博物館長の Danilov, V.J. (1991) は、「企業博物館（Corporate Museum）とは、「有形物や展示物を博物館のように配置し（museum-like setting）、企業の歴史や運営や重大事を、従業員や顧客や取引先や一般社会に伝える企業施設」（筆者訳）であり、公共博物館とは異なり、商業的な目的であり、学芸員もおらず、一般公開されていない館もある

## 企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

と指摘している。Danilov, V.J.によれば、アメリカで最古の企業博物館らしきものは、1892年にシンシナティの楽器製造会社 The Rudolph Wurlitzer Company が、重役室に音楽家や楽器の彫刻や絵画を飾ったのが始まりである。現在は同社の公式サイトによれば、「NTHistory Museum」として公開されている。また、1904年にはピッツバーグにハインツ (Heinz) が「創業の地 (“Where we began” house)」を開設した。現在は同社の「History Center」として公開されており、公式サイトによれば、「創業者が8歳で母親の農場の商品をいかにして販売し、ファミリービジネスを始めてグローバル企業に成長させたか」を知る場所となっている。

このほか海外の企業博物館としては、イギリスのウエッジウッド博物館 (図1~3)、イタリアのフェラーリ博物館や自動車博物館 (フィアット社)、アメリカのヘンリー・フォード博物館、ハーレー・ダビッドソン博物館、ニューヨークの金融博物館、ウォルマート博物館などがある。展示内容は、創業者のエピソードに始まり、歴史的な自社製品と技術的發展を展示したもので、工房体験ができたりする点でも、日本の多くの企業博物館と同じである。



図1 創業者像

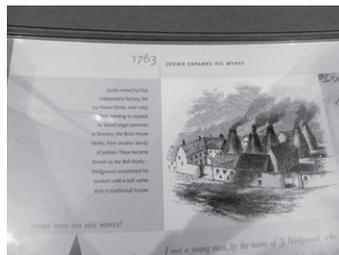


図2 創業時からの事業を説明



図3 クリームウェアで王室御用達となった技術

日本の最古の企業博物館は、京都市の川島織物の「川島織物博物假館 (現・川島織物文化館)」で、1890年に開館している。しかしほとんどの企業博物館は戦後の開設である。「企業史料協議会」が1987年に公表した調査結果によれば、①1970年代以降に設立されたものが多く、とくに1980年代に急増した、②設立の契機は、周年記念事業や古い施設・記念物の活用が多い、③展示内容は、創業者・事業の歩み等の歴史展示、科学・技術的展示、製品・サービスに関する文化的展示など、④立地・スタッフ・費用・入館者数等の運営面で課題・問題点が多い、などの特徴がある。伊木 (2016) は、企業博物館が増加した背景として、1970年の大阪万博の影響を挙げる。各企業のパビリオンの展示が人々を魅了した。その後、日本の産業史や産業技術史の拠点となる国立博物館を誘致しようという動きが起きたという<sup>1)</sup>。

佐々木朝登 (1987) は、企業名を冠した企業博物館について、「企業がその生業にかかわるものの資料を保存、展示、公開している施設」とし、星合重男 (1995) は「自社の歴史とその背景にかかわる諸資料を保存・展示し、企業理念の理解を得るために、企業が設立する施設」と定義した。さらに星合は、企業博物館を5つに類型化しており、①史料館 (創業者

に関わる史料を保存・展示), ②歴史館(自社製品や生業に関する史料を保存・展示), ③技術館(新技術の解説や商品の特徴, 活用法の展示), ④啓蒙型(自社の企業理念と社会貢献), ⑤産業館(工場見学にセットされた展示)と分類している。

実際には, 星合の5分類に該当しないような, エンターテインメント型の施設も「企業博物館」と称している。創業者理念を全面に出し, 長年の一貫した歴史を展示するより, 現在の商品技術を全面に出し, 家族向けに楽しい体験ができる娯楽施設や, 小学生の社会科見学に対応した教育施設にした方が簡単に集客でき, 短期的な業績にも貢献するからであろう。町田(2020)は, 企業博物館135館の公式サイトにおける開設目的や理念等をテキストマイニングしたところ, 「体験展示教育普及型」「資料収集保存型」「産業・業界史型」「五感追及型」「功績顕彰型」という5つのクラスターに分類された。実際に多くの企業博物館を訪れると, 教育普及や五感追及を目的とした施設も多いことがわかる。

しかし「博物館」という本来の役割を考えれば, 企業の創業者精神や技術開発の過程を収集・保存し, その歴史的発展を視覚的に展示してステークホルダーに伝達することに, 社会的価値があるはずである。実際, 海外の企業博物館は歴史的展示が中心となっており, 前述のように「History Museum」「History Center」と称している施設も多い。そこで次に, 歴史的史料の保存や創業者理念を伝達することの価値について検討する。

## 1-2. 歴史的産業物の社会的価値

企業の工場施設や生産機器, そして産出された製品は, 歴史的な価値を持つ。例えば, 群馬県の富岡製糸場は, 日本初の近代的な製紙工場であり, 2005年には国史跡に, 2006年には初期の建造物群が国宝および重要文化財に指定されている。2014年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が, ユネスコの世界文化遺産に登録された。工場内の主要建造物や製糸機などは見学施設になっており, 明治期からの歴史を体感できる場所である。

日常的な製品についても, 例えば愛知県の市立「北名古屋市歴史民俗資料館(通称「昭和日常博物館」/師勝町歴史民俗資料館として1990年開館)は, オート三輪や足踏みミシン, 赤電話など, 昭和の日常生活の用具や玩具を収集, 保存, 常設展示し, 2020年に第1回日本博物館協会賞を受賞した。産業的な建造物や商業物を保存・展示することが, 博物館として価値があると評価された一例である。

井上・野尻(2004)は, 「産業考古学」という概念を用いて, 産業記念物や産業遺産を保存・研究・展示する中心的意義について, 企業博物館は「生涯学習の機関」だという。資料を収集・保存し, 展示する基本的機能に加えて, 地域住民の文化活動の場, 生涯学習施設, さらに町づくり・村おこしの一環となるなど, 社会的コミュニケーション機能があるからである。

歴史的産業物の社会的価値を確認するため, 旧財閥系の建造物で, 国の重要文化財に指定され, 公開されている建物を挙げてみる。三井本館(東京), 旧三井家下賀茂別邸(京都),

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

三井三池炭鉱（福岡）旧岩崎邸（東京）、明治生命館（東京）、住友活機園（滋賀）などが重要文化財に指定され、一部が一般公開されている。明治安田生命保険（三菱グループ）の本社に隣接した「明治生命館」（1934年竣工）は非公開だが、1997年に国の重要文化財となった。皇居馬場先門に面した建物はコリント様式の列柱が存在感を持ち、美しさに定評がある。戦後、アメリカ極東空軍司令部として接収されており、歴史的な価値を考えて「全館保存」されている。三井文庫（三井記念美術館）、静嘉堂文庫（三菱）、泉屋博古館（住友）が所蔵する工芸品・美術品のコレクションも重要文化財に指定されている。

経済産業省は、幕末から昭和初期にかけての産業近代化の過程は、「今日の『モノづくり大国・日本』の礎」であり、「今日の基幹産業のルーツの一つとして極めて大きな意義を持っている」として、地域史・産業史のストーリーを軸に整理・編集し、「近代化産業遺産群」を認定している。2007年に33件（個々の認定遺産は575件）が、2009年には新たに続33件（同540件）と「ストーリー及び構成資産」が公表された。その範囲は、近世の工作機械や精密機器、蒸気・内絵燃機関を活用した動力機、自動車、航空機、家電、化学工業、耐火煉瓦、トンネル建設、連絡船、鉄道、鉄橋・陸橋、港湾土木技術、治水・砂防技術、灯台、電気通信技術、水道施設、娯楽・消費文化など、広範囲に及ぶ。神戸の商船三井ビル、北海道の三菱美唄炭鉱と関連遺産、長崎の三菱重工業長崎造船所史料館の旧木型場と所蔵物、横須賀の旧住友重機械工業浦賀艦船工場第1号ドック等の工業設備のほか、三越日本橋本店本館、伊勢丹本店本館、和光本館等も近代化産業遺産である。参考資料の「ストーリーに登場する人物リスト」には、田中久重、森村市左衛門、豊田佐吉・豊田喜一郎、松下幸之助等が並ぶ。

こうした産業遺産は、一般公開されてこそ社会的価値を持つ。例えば日本銀行の本店本館（東京都中央区日本橋・1896年竣工）は、国の重要文化財に指定されているが、本館地下（地下金庫、旧営業場、展示室）はガイドの解説付きで見学できる。日本銀行京都支店（1906年竣工）は現在の京都文化博物館別館であるし、旧小樽支店（1912年竣工）は「金融資料館」となって小樽市指定有形文化財に指定されている。旧岡山支店（1920年竣工）は、国の登録有形文化財に登録され、現在は県の所有で「おかやま旧日銀ホール」となっている。

### 1-3. 創業者精神や産業技術を展示する広報的利点

本論文では、本業に関する産業技術を公開展示することのマクロ視点での社会的価値と、企業にとってのミクロ視点での広報的利点を考察したい。まずマクロ視点で考えると、歴史的資産は、企業の史料室に眠ることなく適切に保存され、一般公開されてこそ価値があり、「社会とその発展に貢献」できる。その空間が企業博物館であり、歴史的な価値を意識して史料や建造物を収集・保存・展示し、学芸員を置いている施設もある。次にミクロ視点で企業広報の観点から考えると、歴史的な製品や技術を展示することで、その企業が日本の近代化を担ってきたという事実を見学者に伝えるだけでなく、創業者精神の原点を可視化するこ

とができる。企業創業者の想いや技術的工夫と苦難の歴史は、単に説明文を読むより、企業博物館の実物展示や再現動画を見た方が理解しやすい。そのため、企業博物館見学を新入社員研修の一環で義務付けている企業もあるほどである。大企業となっても奢らず、創業時の精神を忘れることなく襟を正す姿勢を視覚的・情緒的に体感することは、コンプライアンス意識やインテグリティの浸透にも通じる。取引先や投資家の見学者が多い施設もあり、現在の生産技術力を知るための工場見学と並行して、企業博物館で企業の沿革を理解してもらおうとしている。企業の根幹にある抽象的な「思想」ともいうべき創業者精神や産業技術を、メッセージとしてステークホルダーに伝えるという、広報的利点があるからである。

歴史的意義の伝達ツールには「社史」もある。企業博物館は「周年記念事業」の一環として企画されることが多く、伊木 (2016) は、その設立目的は、社史の刊行と共通しているという。確かに社史は、創業何周年かの記念事業として編纂・発行されることが多い。村橋 (2002) は企業社史の目的として①経営者教育、社員教育、②資料・情報の整理・保存、③PR活動、イメージづくり、の3つを挙げている。これは企業博物館の目的とも共通する。しかし、資料集のような社史より、現物展示の工夫によって視覚・聴覚、ときには触覚・臭覚・味覚という五感に訴えかける企業博物館の方が、メッセージの伝達力は圧倒的に高い。

企業博物館のメッセージ伝達機能を指摘した先行研究は多数ある。例えば白石 (2016) は、製品が同質化して競争が厳しい市場において、企業ブランディングには「経験価値」が重要であるとして、体験型の企業ミュージアムを取り上げ、「場」の体験による消費者の「彫り込み」が「信頼感と信用の獲得」につながるとしている。高柳・粟津 (2014) は、企業博物館という施設によって、企業の歴史を展示として従業員に示すことが、企業のアイデンティティ形成への関与の一つだと指摘している。企業のルーツや挑戦・成功、危機とその克服などを実物やレプリカを使って展示することで、従業員が自分達の組織の独自の歴史を理解することができるからである。矢崎 (2013) は企業ミュージアムの教育機能に着目し、企業と消費者との間の情報格差を解消し、対話の場を提供する機会になれば、存在価値が増大すると述べている。堀江 (2015) は、企業博物館は、地域社会を含めたステークホルダーに対する社会的価値の提供だけでなく、企業経営において、持続的な競争優位の獲得につながると指摘している。さらに高柳 (2015) は、企業博物館が産業観光の施設として社会的背景のストーリーを発信し、地域の人々や周囲の認識に働きかけることで、地域社会のアイデンティティの形成に貢献することができるとしている。遠藤博志 (2001) は、「各企業や商品の歴史、商品ができるまでの生産プロセスとともに、企業活動が築き上げてきた技術をみることができ」と述べている。

さらに、個別企業の博物館は、市町村など自治体の観光施設となって公共的なガイドブックや自治体の公式サイトに「市の観光地」として掲載されたり、新聞やテレビで記事になったりする。近年は個人の見学者が自分の印象や写真をSNSに挙げることも多い。観光サイト・トリップアドバイザーの「日本人に人気の博物館ランキング2020」では、1位が鉄道博

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

博物館（埼玉）、2位がトヨタ産業技術記念館（名古屋）だった。観光客に企業の歴史を知ってもらい、その印象が拡散されていくという広報的利点は大きい。

#### 1-4. 企業博物館の多様性を踏まえた本研究の意義

企業博物館を開設するだけで企業の歴史的偉業が伝わるわけではない。前述のように、製品のキャラクター展示や食品の工場見学をメインとしたエンターテインメント重視の館や、小学生の社会科見学に対応するような教育的展示を行っている館もある。地域社会への貢献も企業博物館の役割の一つであり、館内に自社名を出さず、業界の技術情報を啓発する展示に徹している施設もある。各社の展示内容に対する戦略と空間づくりの創意工夫は異なる。

駒橋（2017）は、企業博物館が広報的なオウンドメディア（自社メディア）であり、展示物や体験施設によって各ステークホルダーに自社の存在や業界の重要性を伝える存在であることを指摘した。本論文では、企業博物館のメディア性に着目し、産業遺産の保存・修復・展示を行う社会的価値や、自社や業界の情報をステークホルダーと共有する上での広報戦略としての意義を論じることとする。混同されやすいのは、最先端の製品・技術を顧客や取引先に見せる営業目的のショールームで、企業の創業から始まる歴史的に貴重な製品・技術を展示する企業博物館とは「場」の役割が異なる。本稿では、創業者の理念や産業技術の誕生など、歴史的な史料を視覚的に伝える機能に着目して論じていく。

実際に企業博物館を視察し、さまざまな展示を見ていくと、創業の精神、技術の発展、製品の改良による生活の向上などを知り、その企業の良さを感じる。国立民族学博物館元教授の中牧（2015）は、企業博物館を「神殿」と呼び、創業の精神や企業理念を伝え、来館者に企業メッセージを伝えることを、民俗学者の立場から「入魂」と称した。展示内容と展示方法は館によって異なるため、「入魂」できるかどうかは、メッセージの伝達方法にかかっている。本論文では、各館の産業遺産や創業者精神の展示内容に着目する。

## 2. 企業博物館の展示内容

研究対象とした企業博物館は86館で、表（筆者作成）の通りである。開設年やリニューアルの年、開設の契機を調べ、経済産業省の近代化産業遺産や国の重要文化財に指定されている建物・所蔵品を保存・公開している館についても、個別に表に記入した。調査方法は、①個別の企業博物館に日本広報学会の研究視察として訪問し、館の趣旨や展示方法等について、館長（または広報部の博物館担当者）に約1時間のインタビュー調査をして施設内を見学（23館）、②個人またはグループ（日本広報学会の研究会や大学のゼミ活動）で一般見学者として見学（39館）、③公式サイト等で確認（24館）の3通りである。

最初は某広報部長の勧めで企業博物館の見学に行き、そのメッセージ性に気づいて全国に

研究対象を広げ、日本広報学会の研究会等で本格的に調査訪問を行った。訪問を重ねるにつれてその多様さに圧倒され、今回のテーマに辿り着き、改めて研究テーマの見直しをしたため、調査期間は7年余に渡る。企業博物館はしばしばリニューアルしており、先行研究で紹介された施設を訪れても展示内容が異なっていたこともあるし、筆者が訪問後に改装された館もある。本論文を書くにあたり、基本は訪問時の展示や当時の見学者用資料及び館長からインタビューで聞いた内容を基に書き進めたが、公式サイト等で最新の情報は全て確認して加筆した。論文であるので、創業者名は敬称を省略した。個別館の内容は以下の通りである。

## 2-1. 自動車に関する企業博物館

自動車の企業博物館は、最も見ごたえのある展示である。自動車はイメージが重視される製品であり、製品の背景となるストーリーが重視されることや、歴史的な現物展示がしやすいという事情もあるだろう。欧米でも自動車関連の博物館は多い。創業者が高い志を持ち、技術改良や生産工程を工夫し、財務的な困難を乗り越えて国産自動車を誕生させるまでのストーリーを視覚的に展示している。特にトヨタ自動車関連の企業博物館は、名古屋市の公式観光情報にも記載されているほど地元に着しており、武田(2009)は、名古屋商工会議所等の産業観光の観点から、産業博物館という拠点を持つことで、産業文化財の体系的な収集・保管・展示が可能となり、地元産業の技術の発展が示せるだけでなく、建物それ自体の歴史的価値を見ることもできるし、ものづくりの体験学習の場にもなる、と指摘している。

### ① トヨタ産業技術記念館

トヨタ関連の見学施設は5館あるが、産業の歴史的価値や創業の精神について、最も大量の史料や現物を広大な敷地で展示しているのが「トヨタ産業技術記念館」で、名古屋駅からタクシーで5分の好立地にある。創業者・豊田喜一郎の生誕100周年にあたる1994年6月に開館した。旧工場施設を産業遺産として保存しながら、近代日本の発展を支えた繊維機械と自動車技術の変遷を系統的に展示している。経済産業省の近代化産業遺産に、不動産(旧豊田自働織布工場、旧豊田紡織(株)本社事務所、旧豊田商会事務所)と、多数の所蔵品(豊田式木製人力織機の複製、ガラ紡機、豊田式汽力織機、無停止杼換式豊田自動織機G型、スーパーハイドラフトリング精紡機、環状織機、材料試験室・試作工場、トヨタG1型トラック、トヨタスタンダードセダンAA型)が認定されている。

天井の高い広大な建物に入ると、ロビーの吹き抜けの空間には、基本理念のシンボルとして巨大な「環状織機」が動態展示してある。トヨタグループの創始者・豊田佐吉は織機を自動化した後、1906年に「動力を空費せず、超広幅の布を静かに製織できる」環状織機を発明した。運動の理想である回転円運動により、布を織り上げるという画期的な織機で、世界19カ国で特許を取得している。館内は、豊田佐吉が発明した「繊維機械館」から始まり、膨大な自動織機が展示され、それぞれに解説がついており、実際に係員が動かしてくれる。

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

表 研究対象とした企業博物館の概要と調査訪問日

	館名	企業名	所在地	開設年（／移転またはリニューアル）	開設の契機	歴史的価値	訪問調査日（○は館長等にインタビューした館）	
自動車に関する企業博物館								
1	トヨタ産業技術記念館	トヨタ自動車	名古屋市区	1994年6月	豊田喜一郎生誕100周年	建物や多数の所蔵品が近代化産業遺産	2015年7月11日 2016年11月29日	○
2	トヨタ鞍ヶ池記念館	トヨタ自動車	愛知県豊田市	1974年9月	トヨタ車生産台数累計1000万台	—	2017年2月11日	
3	豊田佐吉記念館	トヨタ自動車	静岡県湖西市	1990年10月	豊田佐吉生誕120周年	—	2017年2月11日	
4	トヨタ博物館	トヨタ自動車	愛知県長久手市	1989年4月	創立50周年	所蔵品が近代化産業遺産	2015年7月11日	
5	トヨタ会館	トヨタ自動車	愛知県豊田市	1977年／2005年	創立40周年	—	—	
8	スズキ歴史館	スズキ	静岡県浜松市	2009年4月	—	—	2017年2月11日	
6	マツダミュージアム	マツダ	広島市	1994年／2022年5月	—	—	2017年8月2日	
9	ヤマハコミュニケーションプラザ	ヤマハ発動機	静岡県磐田市	1998年／2015～2017年	創業40周年	—	2015年9月3日 2017年2月11日	○
7	ヘリテージコレクション	日産自動車	神奈川県座間市	2013年	—	所蔵品が近代化産業遺産	—	
【食品企業】								
10	雪印メグミルク 酪農と乳の歴史館	雪印メグミルク	札幌市東区	1977年／2011年4月	創立50周年／雪印メグミルク発足	史料が近代化産業遺産・北海道遺産	2016年10月31日	○
11	サッポロビール博物館	サッポロビール	札幌市東区	1987年／2016年	—	旧開拓使麦酒醸造所関連遺産として近代化産業遺産・北海道遺産	2016年10月30日	
12	ニッカミュージアム（旧ウイスキー博物館）／ウイスキー余市蒸留所	ニッカ	北海道余市市	／2021年10月	—	建造物が登録有形文化財・近代化産業遺産	2016年10月31日	○
13	江崎記念館	江崎グリコ	大阪市西淀川区	1972年3月	創立50周年	所蔵品が近代化遺産／大阪市の都市景観資源	2016年2月24日	○
14	グリコピア神戸	江崎グリコ	神戸市西区	1988年／2018年	—	—	—	
15	グリコピア北本	江崎グリコ	埼玉県北本市	2012年10月	—	—	2013年7月18日	
16	グリコピア Chiba	江崎グリコ	千葉県野田市	2017年7月	—	—	—	
17	安藤百福発明記念館 大阪池田（カップヌードルミュージアム）	日清食品	大阪府池田市	1999年11月	—	—	2016年2月24日	○
18	安藤百福発明記念館 横浜（カップヌードルミュージアム）	日清食品	神奈川県横浜市	2011年9月	—	—	2016年1月15日	
19	味の素グループうまみ体験館	味の素	神奈川県川崎市	2015年5月	／創業100周年	—	2018年1月12日	○
20	食とくらしの小さな博物館	味の素	東京都港区高輪	2004年1月	—	—	2015年5月14日	
21	カゴメ記念館	カゴメ	愛知県東海市	1974年／1985年	—	所蔵物が経済産業省の近代化産業遺産（食品・醸造）	2017年2月10日	○
22	MIZKAN MUSEUM (MIM)	ミツカン	愛知県半田市	1986年／2015年11月	—	工場群が近代化産業遺産／日本建設業連合会主催のBCS賞受賞／中部建築賞受賞	2017年2月10日	○
23	月桂冠大倉記念館	月桂冠	京都市伏見区	1982年	—	建造物と所蔵品が近代化産業遺産／京都市有形民俗文化財	2017年3月14日	○
24	黄桜記念館	黄桜	京都市伏見区	—	—	—	2017年3月14日	
28	製粉ミュージアム	日清製粉	群馬県林市	2012年11月	—	建造物が近代化産業遺産	—	
25	UCC コーヒー博物館	UCCHD	神戸市中央区	1987年／2013年10月	神戸ポートピア博(1981)が契機／創業80周年でリニューアル	—	2017年3月15日	○
26	WoodEgg お好み焼き館	オタフクソース	広島市西区	2008年6月	—	—	2017年8月2日	
27	もの知りしょうゆ館	キッコーマン	千葉県野田市	1991年5月	—	建造物や醸造設備が近代化産業遺産	2016年9月13日	
29	マヨテラス	キュービー	東京都調布市	2014年6月	—	—	—	
30	鈴廣・かまぼこ博物館	鈴廣	神奈川県小田原市	1998年11月／2016年10月	—	—	2018年9月11日	
31	中華まんミュージアム	中村屋	埼玉県入間市	2019年1月	—	—	—	
32	カルピスみらいのミュージアム	カルピス（アサヒグループHD）	群馬県	2019年10月	—	—	—	
33	森永エンゼルミュージアム（MORIUM）	森永製菓	神奈川県鶴見市	2022年1月	—	—	—	
創業者の思想を伝える関西の企業博物館								
34	大阪企業家ミュージアム	大阪商工会議所	大阪市中央区	2011年6月	創立120周年	—	2017年3月15日	
35	パナソニックミュージアム	パナソニック	大阪府門真市	1968年3月／2018年3月	創業50周年	所蔵品が近代化遺産	2018年7月16日	○
36	松下資料館	（パナソニック）	京都市南区	1994年5月	松下幸之助生誕100年	—	2015年10月29日	
37	京セラファインセラミック館	京セラ	京都市伏見区	1998年10月	—	—	2017年3月14日	○
38	稲盛ライブラリー	京セラ	京都市伏見区	2013年	—	—	2017年3月14日	
39	オムロンコミュニケーションプラザ	オムロン	京都市下京区	2007年7月／2015年5月	—	—	2015年10月29日	
歴史と伝統を実感する展示								
40	田辺三菱製薬史料館	田辺三菱製薬	大阪市中央区	2015年5月	—	—	2017年3月15日	○
41	くすりの道修町資料館	—	大阪市中央区	1997年10月	—	—	2017年3月15日	
42	DaiichiSankyo くすりミュージアム	第一三共	東京都中央区	2012年2月	—	—	2016年3月10日	

館名	企業名	所在地	開設年 (／移転またはリニューアル)	開設の契機	歴史的価値	訪問調査日 (○は館長等にインタビューした館)
43 内藤記念くすり博物館	エーザイ	岐阜県各務原市	1971年		建造物と所蔵品が近代化産業遺産	—
44 島津製作所創業記念資料館	島津製作所	京都市中京区	1975年／2011年4月	創業100周年／創業135周年	建造物が国の登録有形文化財・近代化産業遺産	2016年2月23日
45 大林組歴史館	大林組	大阪市中央区	2001年10月	創業110周年	建造物が近代化産業遺産	2018年8月29日
46 グンゼ博物館	グンゼ	京都府綾部市	1996年	創立100周年	製糸関連施設が近代化産業遺産	—
明治期の新しい生活様式を開拓した企業						
47 資生堂企業資料館	資生堂	静岡県掛川市	1992年	創業120周年	—	2015年9月3日 ○
48 花王ミュージアム	花王	東京都墨田区	2007年1月		—	2016年10月13日他5回 ○
49 花王エコラボミュージアム	花王	和歌山市湊	2011年		—	—
50 TOTOミュージアム	TOTO	北九州市小倉北区	2015年8月	創立100周年	所蔵品が近代化産業遺産	2017年8月3日
51 ブラザーミュージアム	ブラザー工業	名古屋市長徳区	2005年／2018年1月	愛知万博	所蔵品が近代化産業遺産	2017年2月10日
52 カワサキワールド	川崎重工業	神戸市中央区	2006年5月／2016年10月	創立120周年でリニューアル		2017年3月15日 ○
53 石川島資料館	IHI	東京都中央区	1998年5月		所蔵品が近代化産業遺産	—
公共性の高いコレクション展示						
54 印刷博物館	凸版印刷	東京都文京区	2000年10月	創業100周年	—	2022年7月22日他4回 ○
55 市谷の社・本と活字館	大日本印刷	東京都新宿区	2020年11月		—	—
56 竹中大同工具館	竹中工務店	神戸市中央区	1984年7月／2014年	創立85周年	所蔵品がユネスコの無形文化遺産	2015年10月30日 ○
鉄道等の乗り物に関する博物館						
57 鉄道博物館	JR 東日本	さいたま市大宮区	1921年／2007年10月	鉄道開業50周年／JR東日本創立20周年	本館は近代化産業遺産／国の登録有形文化財	—
58 京都鉄道博物館	JR 西日本	京都市下京区	1962年／2016年4月		所蔵品が国の重要文化財／土木学会選奨土木遺産	2017年3月14日
59 リニア・鉄道館	JR 東海	名古屋港区	2011年3月		—	—
60 九州鉄道記念館	JR 九州	福岡県北九州市	2003年8月		—	—
61 東武鉄道博物館	東武鉄道	東京都墨田区	1989年／2009年	創立90周年／開館20周年	—	2015年5月16日
62 地下鉄博物館	東京メトロ	東京都江戸川区	1986年7月／2003年6月		所蔵品が近代化産業遺産	—
63 京急ミュージアム	京浜急行鉄道	横浜市西区	2020年1月		—	—
64 ロマンサー・ミュージアム	小田急電鉄	神奈川県海老名市	2021年4月		—	—
65 JAL スカイミュージアム	日本航空	東京都大田区	2013年7月／2021年8月		—	2014年9月29日
業界知識の啓発型自動車・二輪車他						
66 東芝未来科学館	東芝	神奈川県川崎市	1961年11月／2014年1月		所蔵品(レプリカ)が国の重要文化財	2016年1月16日 2019年1月18日
67 三菱みなとみらい技術館	三菱重工	神奈川県横浜市	1994年6月		—	2017年1月13日
68 NTT 技術史料館	NTT	東京都武蔵野市	2000年11月		—	2016年3月24日 ○
69 まほうびん記念館	象印マホービン	大阪市北区	2008年／2018年	創業90周年／創業100周年	—	2015年10月30日／ 2018年8月29日
70 INAX ライブミュージアム	LIXIL	愛知県常滑市	1986年／2006年	社名変更記念／一般公開	建造物が国の登録有形文化財・近代化産業遺産	2016年2月10日
71 容器ミュージアム	東洋製罐	東京都品川区	2012年4月		所蔵品が国立科学博物館の重要科学技術史料(未来技術遺産)に登録	2018年6月6日 ○
72 紙の博物館	王子製紙他	東京都北区	1950年10月／2020年6月		所蔵品が近代化産業遺産	2016年3月31日
73 ガスミュージアム	東京ガス	東京都小平市	1967年		—	2016年3月24日
74 ガスの科学館(がすてな-に)	東京ガス	東京都江東区	1986年／2006年	創立100周年	—	2016年3月10日
75 物流博物館	日本通運	東京都港区	1987年／1998年8月		—	—
76 写真歴史博物館	富士フィルム	東京都港区	2007年		—	2015年9月16日
77 ゼンリンミュージアム	ゼンリン	北九州市小倉区	2003年7月／2020年6月		—	2017年8月3日 ○
78 ニュースパーク(日本新聞博物館)	日本新聞協会	横浜市中区	2000年10月		—	2017年1月13日
79 アドミュージアム東京	電通	東京都港区	2002年12月	吉田秀雄生誕100年	—	2014年1月15日他3回 ○
その他						
80 ヤマトグループ歴史館／タロネコヤマトミュージアム	ヤマトグループHD	東京都港区	2019年11月	創業100周年	—	—
81 セイコーミュージアム	セイコーHD	東京都中央区	1981年／2020年8月	創業100周年／服部金太郎生誕160周年	所蔵品である別館の時計塔が近代化産業遺産	2023年1月13日
82 ノリタケの森／ノリタケウェルカムセンター他	ノリタケカンパニーリミテド	名古屋市中区	2005年／2015年3月	創立100周年	建造物が近代化産業遺産／名古屋市の地域建造物資産	—
83 エビスビール記念館	サッポロビール	東京都渋谷区	2010年2月	エビスビール誕生120年	—	2015年4月16日
84 ニコンミュージアム	ニコン	東京都港区	2017年7月	創立100周年	—	2016年3月10日
85 ユニチカ記念館	ユニチカ	兵庫県尼崎市	1959年6月		建造物が近代化産業遺産	—
86 ソニー歴史資料館	ソニー	東京都品川区	2007年4月1日(2018年閉館)		—	2015年5月14日

(筆者作成)

## 企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

「自動車館」は、豊田喜一郎（豊田佐吉の息子）が開発した国産自動車の技術発展が展示されており、製造工程を等身大の模型や人物が再現しているのでリアリティがある。特に印象的なのは、豊田喜一郎氏の語録である。社内広報誌や取材記事から抜粋した大量の名言が、高い天井から細長い旗のような状態で記載してあり、見学しながら自然と目に入ってくるように工夫されている。例えば、「社長室に来るときは手を洗ってこなくてもいい」という言葉は、喜一郎自身が手を真っ黒にしてエンジンや機械部品の開発を行っていた頃のエピソードをわかりやすく伝えていて親近感がわく。他にも、創業期の社内広報誌の現物が展示され、そこからたくさんの語録を抜き出して文字として展示している。館長（調査当時）が広報部で社内報を長く担当していたこともあり、バックナンバーから選び出した語録を企画展で出したところ、好評なので常設するようになったという。

スタッフは関連企業からの出向も含めて30人以上いて（2015年時点）、館内の要所に案内人やコンパニオンが配置されて歴史的な展示物を動かしながら説明してくれる。筆者が調査に訪れた際は、企画展示として、豊田佐吉生誕150周年を記念して、「佐吉と創造の生涯」が開催されていた。公式ガイドブックは300ページを超え、トヨタの自動車技術の歴史が多数のカラー写真や図入りで専門的な技術が詳細に説明されている。出口の売店にはキーホルダーやミニカーなどトヨタのスーベニーグッズが販売されており、書籍や漫画本も多く並んでいる。ビジネス書から子供向けの本まで大量の書籍が、豊田喜一郎の生涯や国産自動車開発にかける



図4（左） 天井の高いロビーに展示された環状織機

図5（右） 昔の自動織機の実演



図6・7 当時の自動車生産の過程を実物大模型で表現した展示が続く

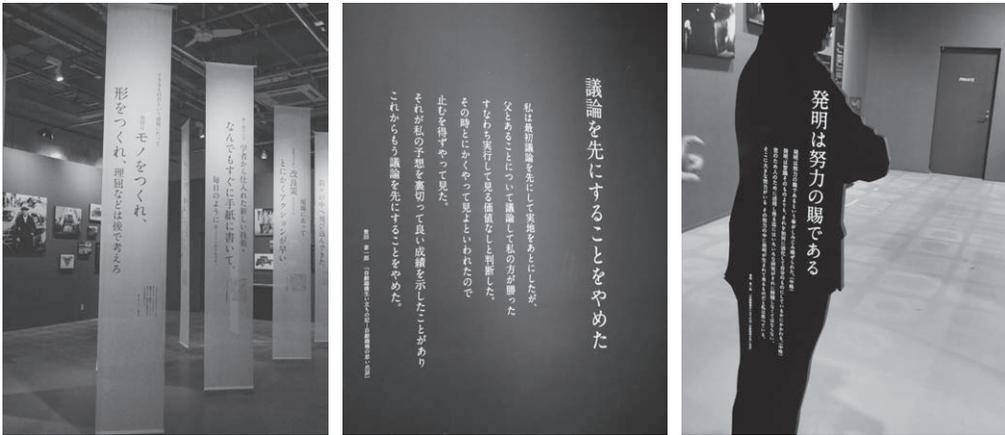


図8・9・10 「発明は努力のたまものである」など、創業者が随所から語り掛けてくるような展示

情熱を伝えている。なお、トヨタ自動車創業期をモデルにしたTBSドラマ『LEADERS』（2014年3月放映／2017年3月に続編放映）のロケでは、この記念館の展示物が使われたという。

## ② トヨタ鞍ヶ池記念館

前述のトヨタ産業技術記念館の見所をコンパクトにまとめたような展示が「トヨタ鞍ヶ池記念館」である。こちらの方が先に開館されており、1974年9月にトヨタ車生産台数類計100万台達成を記念して竣工された。東海環状自動車道の鞍ヶ池スマートインターチェンジを降りてすぐの場所にある。豊田佐吉の「織機」に始まり、息子の喜一郎が「紡織機から自動車へ」と、数々の失敗を繰り返しながら、大衆乗用車製造への夢を抱き、苦難の上乗り越えていった創業期のシーンが、年表に沿って、ジオラマや再現映像で紹介されている。

1935年から終戦直後までにつくられた代表的な乗用車とトラック6台を、5分の1縮尺模型で展示しており、変遷がわかりやすい。日本最初の自動車一貫生産工場の「拳母（ころも）工場（現トヨタ本社工場）」の様子も400分の1縮尺のジオラマで再現展示されている。「ジャスト・イン・タイム」の考え方にに基づき配置された工場群や研究施設、事務所などのほか、寄宿舎・病院なども備え、男女別の更衣室もあり、当時としては福利厚生に配慮した最新の設備であったことが伺える。動画の映像もたくさんあり、労使交渉の動画は迫力があつた。喜一郎が東京大学工学部機械工学科で自動車の技術開発に取り組んでいた頃の直筆のノート数冊も展示されており、細かな筆致が人柄を伝えている。エピソードコーナーには、前述の産業技術記念館のような、喜一郎の人柄を取引先や部下が語った語録が展示されている。

また、記念館を出て奥の坂道を上ると、旧豊田喜一郎邸がある。1933年に名古屋市郊外に建てた住居を移築修復したもので、名古屋の有名建築家が設計したイギリス風の建築様式で、当時の暮らしぶりが推察できる。なお、鞍ヶ池記念館には「アートサロン」も併設されており、トヨタ自動車の美術品等のコレクションが保存・展示されている。



図 11 (左) 1フロアでトヨタの

創業期が一覧できる



図 12 (右) ジオラマで当時の様

子を再現した展示



図 13 (左) 創業期の社内報と創

業者の大学時代のノ

ート



図 14 (右) 関係者の喜一郎評

### ③ 豊田佐吉記念館

豊田佐吉記念館は、静岡県湖西市にあり、1990年10月に佐吉の生家を復元した、茅葺屋根の建物である。鞍ヶ池記念館から高速道路で約1時間の距離にあり、トヨタの源流を知る「聖地」である。佐吉は、1890年に東京で開催された内国勧業博覧会で外国製織機を見て感銘を受け、独力で「豊田式木製人力織機」を発明した。1924年には世界一と評価された「G型自動織機」を完成している。布を織る工程で糸が切れると自動で停止する仕組みや、シャトル（横糸が巻かれた籽）の糸がなくなる寸前に自動的に新しい糸が巻かれたシャトルに入れ替わる仕組みが、現物展示とともに詳細に説明されている。佐吉の発明した豊田式木製人力織機、糸繰返機、木鉄混製動力織機、G型自動織機、小学校卒業証書、特許証のほか、現在のトヨタ自動車の企業理念となる「綱領」などが展示してある。

記念館に展示してある織機は動態保存されており、足の動きで調整しながら縦糸と横糸を織っていく過程がよくわかった。幼い頃、母親が機を織っているのを見て、少しでも楽に織物を織れるように、と自動織機を発明した、という有名なエピソードも実物大フィギュアで展示されている。出口付近には、豊田佐吉の伝記が並んでおり、日本の産業発展に大きく貢献した人物として、昔は数々の出版社から多数の書籍が発行され、少年少女向けの伝記や漫画化もされていたことがわかる。案内のパンフレットには読み仮名がついたものもあり、低学年の子供も「発明ひとすじ」に「母のため、人々のため」「失敗を恐れずに」「夢はかぎりなく」歩んだ佐吉の生涯が理解できるようになっている。

記念館の裏山の遊歩道を登ると展望台がある。海外に紡織工場をつくる計画を周囲から反対されたとき、佐吉は「障子をあけてみよ 外は広いぞ」というグローバル精神を説き、この名言は生家の裏山の展望から生まれた、といわれている。確かに見晴らしがよく、浜名湖

と富士山が一望できる景色であり、広い視野を育んだことが実感できる。

2017年2月11日は、豊田佐吉の生誕150周年を記念する式典が湖西市の主催で盛大に開かれた。その日に筆者がこの館を訪れたのは偶然だったが、佐吉記念館の前の広い駐車場にはトヨタの高級車が並んでいた。役員や部長クラスが奥の集会室へ集まったという。



図15 茅葺屋根の家が復元



図16 少年期のエピソードが再現



図17 日本初の自動織機と「綱領」

#### ④ トヨタ博物館

トヨタ博物館は、前述の3館とは展示目的が異なり、「世界の車の進化と文化をたどる博物館」で、世界の車の歴史を保存・展示した施設である。トヨタ自動車創立50周年記念事業として、1989年4月に設立された。1999年には、新館（現・文化館）を併設し、2019年には、文化館2階を「クルマ文化資料室」としてリニューアルした。

「クルマ館」では日米欧の代表的な車約140台が展示され、19世紀末のガソリン自動車誕生から現代までの自動車の歴史が一覧できる。全ての車両は動態保存で、走行可能な状態を保っている。19世紀のヨーロッパの馬車から、1909年の「フォードモデルT」や1910年の「ロールスロイス40/50HPシルバースト」などの現物など、当時のロマンとステイタスを感じさせる豪華な幻の名車の数々が展示されていて見ごたえがある。1936年に「トヨタAA型乗用車」（当時は「トヨタ」と濁点有）が誕生して以降、国内の主要なメーカーの乗用車もほぼ全て揃っている。

「新館（現在の「文化館」）」は6つのゾーン（前史、戦後、国産、成長、マイカー、多様



図18 クラシックカーが勢揃いした展示



図19 近代化産業遺産のトヨタ車第1号(復元)

化)に分かれ、「前史」は明治から昭和初期までの日本の自動車史を9面の映像と模型と実車で見る。1959年に本格的な国産乗用車トヨタクラウンが発売され、1960年代には高度経済成長期の中で、「三種の神器」として、カー（車）、クーラー、カラーテレビが普及し、モータリゼーションが普及したことが、現物とともに展示・解説されていた。新館の公式ガイド「クルマと暮らしの博物誌」にも、自動車が生活に根付いていった過程が解説されており、生活文化史を語る上で貴重な資料となっている。「文化館」に名称変更してからは、「移動は文化」をテーマに、ポスターや自動車玩具、カーマスコットなど自動車にまつわる文化資料、約4000点を展示している。

このほか、トヨタ自動車の文化施設としては「トヨタ会館」が本社工場の見学ツアーを行っている。5館は館のコンセプトや展示内容が異なっており、各ステークホルダーの多様なニーズに合わせた現物展示となっている。

#### ⑤ スズキ歴史館

浜松市のスズキ本社の向かいにある建物で、2009年4月に開館した。入口を入ると、初代社長・鈴木道雄が発明した「杼箱上下器搭載の足踏み式織機」が展示されている。母親をラクにさせるために開発した、というエピソードや模型による再現は、豊田佐吉記念館と同じである。佐吉の生家とは、車で小一時間しか離れていない地域であり、当時はこの地域の女性が織機を折って生計を支えていたのだろう。ただしこちらは織機のスペースはわずかで、「二輪車開発物語」や「レースへの挑戦」などが続き、二輪車や自動車の開発や市場開拓の過程がメイン展示である。

長くトップを務めた鈴木修の経営ビジョンに関する展示も多い。例えば「アルト誕生物語」は、運転は男性がするものという時代に、主婦が気軽に乗れる車というコンセプトを貫いて開発し、1979年に発売して大ブームとなった。また、グローバル市場でトップシェアをとることを目標にしてインド市場に参入して成功したことなど、現物展示に映像が挿入されて印象づけている。



図20 自動織機に始まるルーツを再現した小部屋



図21 創業期の技術と苦勞と広告を展示



図 22 「アルト」で成功して海外展開



図 23 中興の祖である前社長の経営方針

⑥ マツダミュージアム

広島駅に近い工場敷地内にあり、1994年5月に開館し、2005年2月、2022年5月とリニューアルを重ねた。1920年に「東洋工業」として創業してから現在までの、歴代の製造車種が展示してある。2017年に調査訪問した際は、トヨタの館に比べると創業時の歴史についての解説が少なく感じたが、2022年には、創業者・松田重次郎の原点が感じられるように改装したという。

⑦ ヤマハコミュニケーションプラザ他

「現在・過去・未来」と「コミュニケーション」をキーワードにしている。見学者用資料には、「お客様をはじめ、取引先の方々、ヤマハ発動機グループの社員と情報交換、交流することで、ともにスキルを高め合うことをコンセプトにしています」とある。地域住民のほか、消費者、従業員、取引先を意識した展示である。歴史コーナーには、創業時をまとめた動画もある。ヤマハの創業は、1887年に創業者・山葉寅楠がオルガン修理をしたことだが、ヤマハ発動機の歴史は、1955年にヤマハ発動機創業者の川上源一が、戦後間もない日本で「余暇を楽しむ豊かな生活」を提案し、モーター部門を分離独立させたことから始まる。「感動創造企業」としての軌跡が展示されており、歴代の二輪車だけでなく、ボートや船、スノーモービルや電動アシスト自転車、ヘリコプター、産業用ロボットなど、日本のモータースポーツを創造してきた過程が実感として伝わる。1998年に開設され、2015年から3か年かけてリニューアルして展示内容を一部変更し、歴史コーナーも拡充した。レストランや図書



図 24 第1号製品 YA-1



図 25 1000分の1秒を刻むマシン



図 26 世界グランプリ優勝の記録

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

コーナーもあり、地域住民が立ち寄りやすい場所となっている。

また、日産自動車は、座間工場跡地（現事業所内）に往年の日産車 450 台以上を集めた施設「ヘリテージコレクション」を 2013 年から限定的に公開している。ここのダットサン 11 台も近代化産業遺産に認定されている。

## 2-2. 食品メーカーの企業博物館

次に、消費者に身近な食品企業の博物館を挙げる。近代化産業遺産の建造物を見学コースにしたものや、工場見学に付随した施設まで、最も企業博物館が多い業種である。中牧(2015)は、飲食関係の企業博物館 155 館を調査し、事業展示や歴史展示に加え、体験展示が基本的に重要な機能を担っていると指摘している。一種の興奮状態を引き起こし、「すごい、楽しい、美味、絶品」といった感覚や体験が感動を呼ぶからである。本論文では経済産業省の産業近代化遺産に認定された建造物や所蔵品があり、北海道開拓史を伝える企業博物館を考察していく。

### ① 北海道開拓史を伝える記念館：雪印・サッポロ・ニッカ他

北海道札幌市の創成川以東は、明治期から産業が栄えた地域で、北海道の産業史を知る上で重要な役割を持つ。そのため、北海道鉄道技術館、サッポロビール博物館、酪農と乳の歴史館、千歳鶴酒ミュージアム、福山醸造は、歴史的な記念館群として、北海道に「札幌苗穂地区の工場・記念館群」と指定されている。

まず「雪印メグミルク 酪農と乳の歴史館」は、前身の北海道製酪販売組合の創立 50 周年を記念して建設を決め、1977 年に雪印史料館として落成した。北海道遺産に指定されているほか、館内の史料は経済産業省の近代化遺産に認定されている。2011 年 4 月、雪印メグミルク株式会社発足とともに、「酪農と乳の歴史館」として新たにスタートした。3 階建ての建物内には、開拓当時のバター製造機、粉乳用の濃縮機、乾燥機などが、実物または 30 分の 1 サイズの模型で展示されている。会社の歴史を展示したコーナーもあり、欧米の酪農技術を取り入れて北海道の開拓史を発展させてきたことがわかる。館内は撮影禁止だったが、2000 年の食中毒事件についても隠さずに表示してあった点は好感が持てた。来館時に住所氏名を記入して、見学者全員に感謝の手書きハガキが届いたのは、この館だけである。

次に「サッポロビール博物館」は、1890 年に建造された札幌開拓使麦酒醸造所を活用した施設である。美しいレンガ造りの建物で、前述のように「札幌苗穂地区の工場・記念館群」として北海道遺産になっているほか、「旧開拓使麦酒醸造所関連遺産」として経産省の近代化産業遺産にも認定されている。館内では、明治期の開拓期に初の国産ビール「札幌製麦酒」が生まれた過程が大型スクリーンの映像で見られる。創業時からビールの仕込みに使っていた大型の煮沸釜や、明治期からのサッポロビールの看板や広告などを見ながら、日本のビール業界の発展の歴史が実感できる。隣接の「サッポロビール園」は観光客が多く訪れ



図 27 北海道開拓史と麦酒醸造の始まり



図 28 官営から民間企業へ移行した経緯

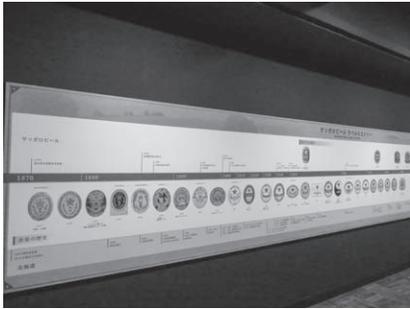


図 29 サッポロビールのラベルの変遷



図 30 明治期からの広告・ポスター

る大規模ビヤホールとなっている。

また、「ニッカウキスキー余市蒸留所」は、札幌から小樽経由で約1時間半の余市にある。ニッカの創業理念を伝える見学施設で、敷地面積は約15万平方メートルと広い。蒸溜所内の建造物9棟が「登録有形文化財」に登録され、経産省の「近代化産業遺産」にも認定されている。「旧事務所」（余市町指定有形文化財）、「事務所棟」「貯蔵棟」「リキュール工場」「第一乾燥塔」「第二乾燥塔」「研究所・居室（現リタハウス）」（以上国の登録有形文化財）、「第二貯蔵庫」の10棟が、2022年2月には、国の重要文化財に指定された。

「ニッカ館」では、国産の本物ウイスキーづくりを目指した創業者・竹鶴政孝の生涯が紹介されている。理想のウイスキーづくりを追求するため、大阪の寿屋（現・サントリー）を退職して北海道に渡り、大日本果汁株式会社（現・ニッカ）を設立し、「日本のウイスキーの父」と呼ばれた人物である。その情熱と苦勞の過程を再現するため、当時の蒸留器の現物展示があり、適切な火力を保ちながら石炭をくべる「石炭直火蒸留」の実演もしてくれる。竹鶴をモデルにしてNHK連続テレビ小説『マッサン』（2014年9月～2015年3月放映）が放映された後は、見学者が急増したという。筆者が調査訪問した際には、竹鶴の自宅を案内付きで見学することができ、実際に使われていたピアノや、ハイティーセット、パイプのある洋風の生活様式と、床の間のある和室が共存しているのを見て親近感がわいた。

「ウイスキー館」では、ウイスキーの蒸留の仕組みなどを紹介しており、ショップでは余

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

市限定ウイスキー他、多種多様な土産物があり、レジには列ができていた。なお、「余市町観光ガイドブック」には、最初のページに「原点はここにある」と余市蒸留所が紹介されており、地元産業にも貢献していることがわかる。小樽商科大学の企画・編集による『余市・小樽における竹鶴政孝とリタ』という小冊子もあり、創業者夫婦の生涯がまとめられていた。



図 31 余市蒸留所の外観



図 32 創業時の蒸留機器



図 33 ジオラマで創業期を再現



図 34 「石炭直火蒸留」を再現

## ② 江崎グリコの記念館

1972年3月、「創立50周年記念事業の一環として従業員に創業の志を伝え、社業の発展に寄与するために」(見学者用資料より)、本社敷地内に設立された。最寄り駅のJR東海道線・塚口駅構内には、江崎記念館の看板広告が大きく掲げられている。

館内には、創業以来の江崎グリコの歴史に関する資料・製品・販促品のほか、創業者・江崎利一が「グリコ」を発明したエピソードが展示されている。佐賀県で菓や塩の訪問販売を行っていたが、有明海で牡蠣を煮ているのを見て、「牡蠣には栄養素グリコーゲンが多量に含まれている」と薬業新聞に書いてあったのを思い出した。そこで、牡蠣の煮汁からグリコーゲンを抽出して、1922年に国民の体力・健康づくりを目的とした栄養菓子を「創製」し、「一粒三百メートル」というキャッチフレーズを考案したという。

歴史的な所蔵品として、創業者遺品、江崎利一考案のハート型ローラー・真空釜等、製品パッケージ・販促品、引換賞品類、「グリコ」のおもちゃ、関連古写真・文書類等が展示されており、経済産業省の産業近代化遺産に認定されている。



図 35 (左) 牡蠣の煮汁からグリコーゲンを抽出する創業者



図 36 (中) 創業期からグリコのおまけ



図 37 (右) グリコの自動販売機

なお、江崎グリコの見学施設としては、「グリコピア」が神戸・埼玉・千葉にあり、工場見学や豆玩具の歴史展示などで来館者が楽しめるようになっている。工場見学のほか、創業者が牡蠣からグリコーゲンを発見したというエピソードや、玩具の歴史も展示され、コンパニオンが解説してくれる。家族連れが楽しめる施設で、メッセージは共通しているがターゲットが異なる。2018年には開館30周年でグリコピア神戸がリニューアルされた。

### ③ 日清食品のカップヌードルミュージアム（安藤百福発明記念館）

1999年11月、日清食品の「インスタントラーメン発明記念館」が「体験型食育ミュージアム」として池田市に開設された。即席めん発祥の地で、2017年までは「インスタントラーメン発明記念館」と称していた。また2011年9月には、横浜のみなとみらい駅近くに「安藤百福発明記念館」（愛称：カップヌードルミュージアム）がアートディレクターの佐藤可士和の総合プロデュースで開設され、1年後には累計入館者数100万人を達成し、神奈川県知事（黒岩祐治）より「神奈川観光大賞グランプリ」を受賞している。2017年9月、両施設の名称は統一され、「安藤百福発明記念館 横浜」（愛称：カップヌードルミュージアム 横浜）と、「安藤百福発明記念館 大阪池田」（愛称：カップヌードルミュージアム 大阪池田）になった。両館とも公益財団法人「安藤スポーツ・食文化振興財団」が運営している。

大阪と横浜にある2館で共通して強調しているのは、創業者・安藤百福の発明家としてのユニークさである。百福をモデルにしたNHK連続テレビ小説『まんぷく』（2018年10月～2019年2月）で放映された通り、自宅裏庭の小屋にこもって1人で研究を続け、1958年に世界初のインスタントラーメン「チキンラーメン」を開発し、その後も食の創造に尽力した。この安藤百福の精神「クリエイティブ・シンキング＝創造的思考」と、発明・発見の楽しさを伝えることが両館の目的である。創業時の研究小屋が再現され、安藤百福氏の創業期の再現ビデオを見るコーナーがあり、即席麺とカップ麺という「世界の食文化を革新させた」発明をストーリーとして来館者に伝えている。体験コーナーには、チキンラーメンの生地作り（小麦粉をこねて製麺棒で延ばし、専用機で麺を切り出し、係員に油で揚げてもらう）やオリジナルカップヌードル作りがあり、両館共通だった。



図 38 インスタントラーメンを発明した  
小屋の再現

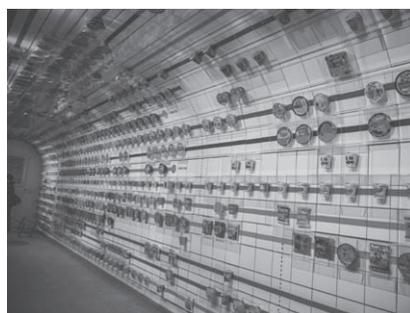


図 39 過去に発売されたカップ麺  
(写真はともに大阪)

#### ④ 味の素グループうま味体験館

味の素川崎工場に隣接した「うま味体験館」は、2015年5月、川崎事業所の創立100周年を記念して開設された。中嶋他(2016)によれば、開設に先駆け、「家庭用事業部で生活者とのタッチポイントを増やすため」工場見学プロジェクトが2012年にスタートし、工場見学の事務局は広報部が統括し、「ファンづくり」の重要な拠点と位置付けているという。

この川崎市川崎区鈴木町は味の素発祥の地であり、京急「鈴木町」駅は、かつて「味の素」駅という名称で、周辺地域は現在もほぼ全て同社が保有している。施設内には、1908年に池田菊苗博士が、昆布だしから「うま味」成分(グルタミン酸)を発見したこと、創業者の鈴木三郎助がうま味調味料「味の素」の製造販売を開始したこと、などが展示されている。昆布だしのうま味、鰹節のほんだしなど、主成分の説明動画は360度の4面スクリーンで迫力がある。体験コースもあり、ほんだし、味の素、CookDoの各コースでは、鰹節削りなどの体験ができる。グッズショップでは、キャラクターのアジパンダの文具類や弁当箱など、多数の実用品が販売されている。

なお、味の素は、高輪研修センター内に「食とくらしの小さな博物館」も開設している(2004年1月開設)。館名の通り小さなスペースだが、味の素の発明者・創業者の足跡から、食卓風景が時代とともに変化し、味の素ブランドの商品、広告物や、アミノ酸等の情報が展示してある。館内には、「食の文化ライブラリー」が併設されており、専門性の高い学術書から漫画『美味しんぼ』まで、「食」に関する大量の本を開架式で閲覧できる。図書館は、公益財団法人「味の素食の文化センター」の運営である。

#### ⑤ カゴメ記念館

「カゴメ記念館」は、愛知県東海市のカゴメ上野工場の敷地内にある。所蔵物は、経済産業省の近代化産業遺産(食品・醸造)に登録されている。1897年に創業者・蟹江一太郎が初めてトマトを発芽させた地でもあり、1974年に開設され、1985年に改装された。全体に展示方法が古いのが、それがかえって歴史を感じさせる。創業当時、西洋野菜のトマトは、栄

養があって美味だが、一般家庭から敬遠されていた。しかし蟹江はトマトの栽培に取り組んで西洋料理店に販売する。名古屋唯一の洋式ホテルでトマトソースを分けてもらい、家族総出でトマトピューレを作ったのが、トマト加工業の始まりである。当時の苦労が写真や現物とともに展示してあり、蟹江が座っていた椅子、トマトジュースを飲む肖像写真など（トマトは健康に良いとアピールするため、必ず写真はこのポーズだったという）、当時の温かい雰囲気が伝わってくる。来館時に創業者の胸像の前で撮った写真が、最後に記念シートに加工されて来館記念のお土産になるのは、他館にないサービスだった。



図 40 明治期の道具を展示



図 41 西洋野菜のトマト栽培を始めた創業ストーリー



図 42 トマトジュースを飲む創業者の肖像

## ⑥ ミツカンミュージアム

同じ東海地方の「ミツカンミュージアム (MIZKAN MUSEUM=MIM)」は、愛知県半田市のミツカン本社敷地内にある。運河沿いの蔵を再現した建物で、2017年には日本建設業連合会主催のBCS賞を受賞、また第48回中部建築賞も受賞しているほか、工場群は「伝統食品の近代化や新たな食文化の創造に挑んだ中部・近畿の食品製造業の歩みを物語る近代化産業遺産群」として、経産省の近代化産業遺産にも認定されている。博物館の前身は、1986年に開館した博物館「酢の里」である。2013年11月に一時休館し、体験型企業情報発信施設として生産工程見学ゾーンを加え、2015年11月に新たに開館した。

ミツカンの酢造りに関する資料を集大成し、江戸時代から現在までの酢づくりの歴史や製造工程が見学できる。昔の酢作りの様子が実物大に再現されており、熟成・圧搾・仕込みなどの工程や、職人の仕事がよくわかる。当時は樽売りなので、天秤棒を担いで重さを体験したり、引き出しを開けて5種類の酢の香りを確かめたりと、見学者にミツカンの歴史を体感させる工夫が詰まっていた。展示室の最後の方では、大規模な富士宮丸・為次郎船が再現されている。乗船するとプロジェクションマッピングで当時の風景が再現された映像があり、中壱又左衛門が江戸へ酢を運んだ頃の情景を楽しめる。最後に2種類の酢の飲み比べをするのが、初めて酢が美味だと感じた。



図 43 MIMの外観



図 44 江戸時代の酢づくりの再現

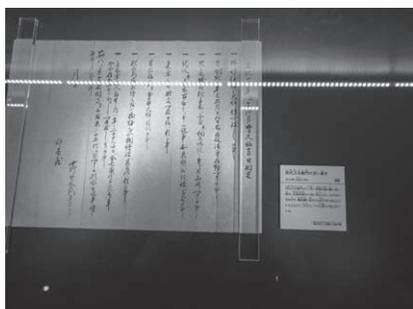


図 45 創業者・初代又座衛門の言い書き



図 46 酢を江戸へ運んだ富士宮丸の再現

### ⑦ 月桂冠大倉記念館

「月桂冠大倉記念館」は、京都・伏見にあり、1982年に開設された。月桂冠が所蔵する酒造用具 6120 点が「京都市有形民俗文化財」に指定されており、代表的な用具を酒造の工程にしたがって展示している。創業は 1637 年で、初代大倉治右衛門が酒屋を開業してから、良質の水と京都・大阪への水運に恵まれて栄え、1905 年に「月桂冠」銘柄が誕生した。月桂冠大倉記念館とその所蔵物、内蔵酒造場、月桂冠旧本社、月桂冠昭和蔵、旧・大倉酒造研



図 47・48 (左・中) 「京都市有形民俗文化財」指定の酒造用具類

図 49 (右) 伏見の酒を特徴づける伏流水を汲み上げる井戸

究所，松本酒造酒蔵（仕込蔵，貯蔵蔵）は，経産省の近代化産業遺産「日本酒製造業の近代化を牽引した灘・伏見の醸造業の歩みを物語る近代化産業遺産群」に「伏見の日本酒醸造関連遺産」として認定されている。麴室（こうじむろ），醪桶（もろみおけ），酒槽（さかぶね），暖気樽（だきだる）など，約400点の用具類が，江戸時代の酒造りを描いたパネルとともに展示されている様は壮観だった。2020年8月にリニューアルしたという。

伏見は水に恵まれた，江戸期からの銘酒の生産拠点であり，近隣には「黄桜記念館」もある。昔の酒造りをジオラマで再現し，黄桜の「カップCM」シリーズを見られる。

⑧ 製粉ミュージアム（日清製粉グループ）

2012年11月，日清製粉グループが創業の地である群馬県館林市に開設された。明治の創業期に建てられた本館は，経産省の近代化産業遺産に認定されており，日清製粉の創業期の機械製粉黎明期からの歴史を紹介している。新館では館名の通り，小麦の文化史や最新の製粉技術などを解説している。

⑨ UCC コーヒー博物館と「WoodEgg お好み焼き館」

「UCC コーヒー博物館」は，1981年に神戸ポートピア博覧会に出展したパビリオン「UCC コーヒー館」が元となっており，1987年10月1日の「コーヒーの日」に創業の地である神戸に誕生した。2013年10月，UCCグループの創業80周年を記念してリニューアルを行い，現在に至っている。エチオピアで発見されたコーヒーがどのような栽培・鑑定されているか，焙煎・抽出を経てコーヒー文化を形成しているかなどが，ゆるやかなスロープを降りながら展示を見ていく構造である。創業者・上島忠雄の創業理念や歴代のUCC製品などの展示は最後の方の小部屋にまとめられている。

オタフクソースの「WoodEgg お好み焼き館」は，2008年6月，広島市内の本社敷地内に開館した。文字通り「木の卵」をデザインした建物内には，お好み焼き屋を開業するための研修施設もある。お好み焼きの歴史と文化や創業者精神の展示を見て，製造工場を見学する。



図50 UCCの創業者と歴代製品



図51 オタフクソースの創業者精神

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

#### ⑩ その他食品企業の体験型エンターテインメント施設

本論文では、産業遺産の展示や創業者精神の伝達の展示を論じているが、食品関連の企業博物館には、業界知識の啓発やエンターテインメントな体験を目的とした施設も多い。工場内に設置し、自社の歴史展示や製造工程の見学とセットになっている施設もある。

例えば、「もの知りしょうゆ館」は、キッコーマン野田工場の敷地内にあり、1991年5月に開設された。しょうゆの製造工程を映像や展示で紹介し、もろみの熟成の様子やしょうゆの色・味・香りを体験できる。創業時代の展示はないが、野田市の醤油醸造設備としては経産省の産業近代化遺産の建造物に認定されており、「製造管理部事務所」や、本社裏手の「茂木七左衛門邸の煉瓦塀」「茂木佐平治邸」は見学コースに入っていないが見ることはできる。

近年開館した体験型施設も多い。「マヨテラス」は2014年6月、キューピーの東京・調布工場の跡地を活用して開設した。公式サイトによれば「マヨネーズの“なるほど”を楽しく体感できる見学施設」であり、キューピーマヨネーズの歴史や特徴に加え、ものづくりへの姿勢や想いを伝えるという。「ミストミュージアム」は2015年10月に、大阪府吹田市のダスキン本社に近接して開設され、同社の2大事業である「おそうじ館」と併設しており、ドーナツの歴史や製造工程を見学した後、実際のドーナツ作りを体験する。「鈴廣・かまぼこ博物館」は、本社（小田原市風祭）の敷地内にあり、2016年10月にリニューアルオープンした。箱根観光の途中にあり、かまぼこやちくわの手づくり体験が人気であるが、かまぼこ製造の歴史も展示してある。「中華まんミュージアム」は2019年1月、中村屋が埼玉県入間市の武蔵野工場敷地内に開設した。自社の歴史を映像で見て、製造工程を工場見学し、製法をゲーム感覚で学べるコーナーがあり、小学生の社会科見学や地域社会への貢献を目的としている。「カルピスみらいのミュージアム」は2019年10月、群馬工場敷地内に開設された。創業者・三島海雲が内モンゴルで出会った発酵乳をヒントに、カルピスの発明に至ったエピソードを紹介するアニメを観賞する。歴代の広告やパッケージを並べたギャラリーや、映像によって製造工程を学べるコーナーもある。「森永エンゼルミュージアム MORIUM」は2022年1月、森永製菓の鶴見工場敷地内（神奈川県）に開設された。創業期の歴史や主力ブランドの製造工程をパノラマ映像で紹介する「シアタールーム」や、ブランド・商品の特徴や技術・製法や、過去の広告資料の展示のほか、鶴見工場の見学もできる。

### 2-3. 創業者の思想を伝える関西の企業博物館

「大阪企業家ミュージアム」は大阪商工会議所創立120周年記念事業として、2011年6月に開設された。江戸時代から戦前まで大阪経済の中心地だった船場地区にある。大阪は、国立産業史博物館の開設を提唱した地域でもあり、史料の公開・展示をする場が必要と考えたのだろう。公式サイトによれば、「大阪産業界の発展に大きな貢献をされた企業家たちの夢や、苦労や、成功の喜びなどをいきいきと伝え、後世の人々が気概をもって新たな事業に挑

戦する「勇気と希望をはぐくむ場」になること」を目指している。

明治期の広瀬宰平（住友の中興の祖）、武田長兵衛（武田薬品工業）、田邊五兵衛（田辺三菱製薬）、塩野義三郎（塩野義製薬）、小林一三（阪急阪神東宝グループ）、鳥井信治郎（サントリー）、江崎利一（江崎グリコ）、松下幸之助（パナソニック）など、関西出身の創業者105人の企業家精神が映像や展示で一覧できる。ライブラリーやデジタルアーカイブも充実し、1か所で多数の著名経営者の企業家精神の展示を見ると、大阪発祥の「志、先見性、挑戦、創意」の精神が伝わってくるし、社史や伝記なども充実している。

ただ、多くの企業家の話を一気に見ると、各エピソードの記憶が混乱するので、やはり個別の企業博物館が必要だと感じた。

① パナソニックミュージアムと松下資料館

「パナソニックミュージアム」は、松下電器産業（現・パナソニック）の創業50周年を記念して、大阪・門真市の本社敷地内に1968年に開館された。建物外観は創業時の本社社屋を忠実に再現しており、当時としては最新の西洋建築である。1995年3月には、創業者・松下幸之助の生誕100周年を記念して全面的に改装した。2017年10月には一時閉館し、2018年3月にリニューアルして再開している。



図52 「経営の神様」と呼ばれた創業者の全身像



図53 奉公時代の回顧



図54 創業時の再現



図55 創業時の決意

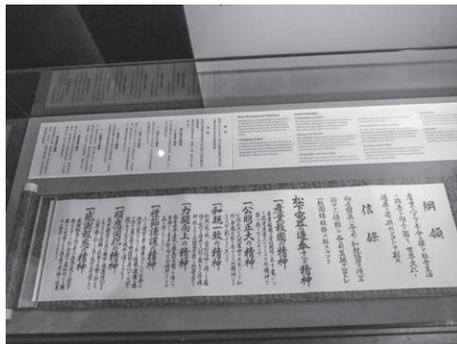


図56 現在も引き継がれる「綱領」



図57 「ナショナル」ブランド開始

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

2館に分かれており、「松下幸之助歴史館」は創業者の理念を、「ものづくりイズム館（旧名称はこちらが「パナソニックミュージアム」）」は事業発展の歴史を展示している。

「松下幸之助歴史館」は、「経営の神様」と呼ばれた創業者の生涯を4つに分けて展示している。第1期は、松下幸之助が小学校を中退して自転車店に丁稚奉公してから、大阪電燈に入社して夜学に通い、退職してソケットの生産・販売に着手するまで。第2期は、松下電気器具製作所を創立し、電池式自動車ランプを開発し、門真に本社工場を建設し、松下電機産業に改組するまで。第3期は第二次世界大戦後、グローバル化の推進と社長退任まで。そして第4期は会長・相談役としての社会的活動である。随所に栞（しおり）が置かれ、「熱意が道をきりひらく」「衆知を集める」「世間は正しい」「道は無限にある」などの幸之助語録と解説が、出典（幸之助の著書『わが経営を語る』等）とともに日本語と英語で書かれている。

当時としては珍しいほど、幸之助は意図的に記録映像を残しており、戦前からの映像や講演などが、大量のビデオライブラリーに保存されている。それを6台のモニターでヘッドフォンを使って視聴すると、「企業は社会の公器」と述べ、いわばCSR精神を提唱し、「事業を通して社会に貢献する」ことを実践した創業者精神が伝わってくる。

隣の「ものづくりイズム館」は、パナソニック創業以来の家電製品約550点を展示している。経産省の近代化産業遺産に認定されている所蔵品は、改良アタッチメントプラグ、二灯用クラスター（二股ソケット）、スーパーアイロン、角型ランプ、電気コタツ&電気コタツ用サーモスタット、3球1号型受信機（R-31）（ラジオ1号機）である。収蔵庫（一般公開



図 58 家電展示の中の創業者



図 59 20世紀の生活家電の歴史



図 60 生活様式の変化を展示

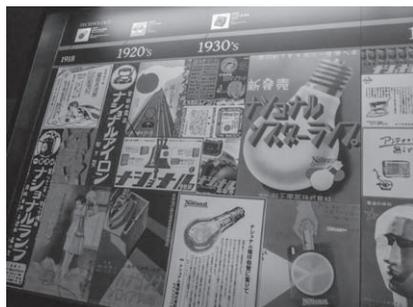


図 61 電球にブランド名をつけた広告



図 62 「コピーライターでもあった幸之助」のエピソード

はガラス越し)には、創業期からの歴代の製品、約400点を展示している。テレビやラジオ、白物家電、パソコン、モバイル製品、乾電池応用製品などで、日本人の生活様式が電化製品によって便利になってきた過程がわかる。

また、京都駅前には「松下資料館」が、幸之助の設立したPHP研究所の建物内にある。生誕100年にあたる1994年、松下社会科学振興財団(2010年に公益財団法人へ移行)によって設立された。財団の理事長は幸之助の孫である。

ここでは、創業者の松下幸之助の生涯と経営に関する理念や実践、思想や活動などが展示されている。前述の「松下幸之助歴史館」と共通の写真や記述も多いが、こちらの方が「経営の神様」といわれた幸之助という人物の生涯や考え方に重点を置いた展示となっている。大阪電燈を依願退職したときの書状から、松下電器産業を起こして発展させ、さらに松下政経塾で啓発してきた経営哲学まで、松下幸之助の人物に焦点を当てている。

幸之助は戦前に、事業経営の根本は経営理念を確立することであり、「経営理念とは、この会社は何のために存在するか、どのようなやり方で経営を行っていくべきかである」と、現在の「パーパス」に通じる概念を提唱した。1927年に「社会は公器」だと目覚め、1929年に経営の基本方針である「綱領」を作成する。これは現在もパナソニックの公式サイトに掲げられ、社員が暗唱している社訓のようなものであり、若い頃から先進的な発想を持っていたことがわかる。



図63 等身大の創業者像(意外と小柄)



図64 幼少期から奉公時代の記録



図65 創業から事業拡大へのエピソード



図66 「悲観より楽観」「一日の遅れは一年の遅れ」などの経営哲学

## 企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

戦後は、繁栄・平和・幸福につながる道を求めて1946年にPHP研究所を設立し、また経営者としてのリーダーの心得や、人材育成の考え方を説き、仕事の哲学や人生の生き方を考察した。さらに1979年には「松下政経塾」を設立し、国家社会への提言活動を行い、多くの政治家や経営者を育てた。「人生の生き方、考え方」「仕事哲学」「経営観」や信念が伝わる展示である。人生を成功させるための「努力・大忍・大道・自立・立志」、よりよい人生を生きるための「素直・自省・平安」、リーダーの心得10カ条「衆知を集めた全員経営・ガラス張り経営」など、現代に通じる経営理念が読みやすく展示され、数々の語録が迫ってくる。映像ブースも4か所あり、関連資料を集めた図書館もある。

### ② 京セラファインセラミック館と稲盛ライブラリー

「京セラファインセラミック館」は1998年10月に本社2階に開設された。京セラが開発してきた製品を、1959年の創業当時から時代順に展示している。ファインセラミックについて、焼き物との違いから、技術的な特性、小惑星探査機「はやぶさ」に採用されたリチウムイオン電子端子など、初心者にもわかりやすい解説付きで現物が展示されている。また、京セラの創業時から現在までの製品・技術を展示し、随所に創業者・稲盛和夫（2022年8月30日逝去）の言葉と解説が掲げられている。「チャレンジ精神を持つ」「成功するまで諦めない」「闘争心を持つ」などで、研究開発に対する信念が伝わってくる。



図 67 入口で創業者の写真が挨拶



図 68 ファインセラミックの解説の一部

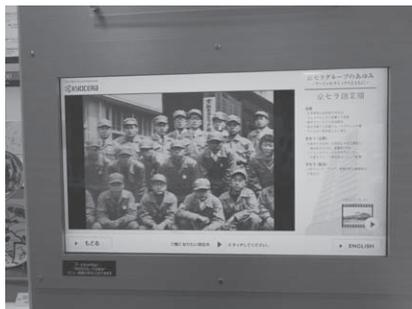


図 69 京都セラミック創業時の動画

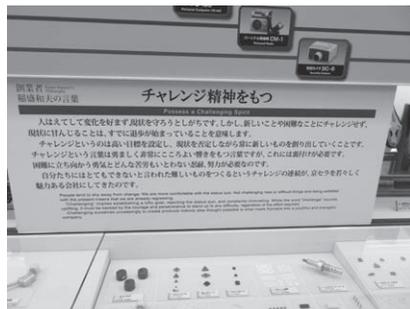


図 70 稲盛語録も随所に展示

本社敷地内には、「稲盛ライブラリー」もある。エントランスには稲盛和夫の座右の銘である「敬天愛人」が掲げられており、5フロアを使って、稲盛氏の生い立ちから、京セラの創業・発展、第二電電（現KDDI）の設立、経営哲学としての「京セラフィロソフィ」、社会活動までが、多くの写真や映像とともに展示・解説されている。例えば、新しいことに挑戦するためには「潜在意識にまで浸透する強い持続した願望を持つ」「楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行する」など、含蓄に富んだ自論が多い。200億円の私財を投じて稲盛財団を設立し、京都賞を創設したこと、稲和塾（1983年から2019年まで活動／塾生は世界で約1万5000人）で多くの経営者を育てたことなど、一つ一つに多数の関係者の写真や背景解説が掲示され、その活動の幅広さと先端的な思想が伝わってくる。講演録画を觀賞するためのブースもあり、たくさんの動画が適度な長さに編集されている。



図 71 鹿兒島の幼少期時代の展示



図 72 粘土研究の卒業論文や起業時の資料等



図 73 経営哲学とその解説が一面に並ぶ



図 74 創業者の講話を選んで聞ける

### ③ オムロンコミュニケーションプラザ

「オムロンコミュニケーションプラザ」は2007年7月、京都駅前の本社隣のビル「啓真館」に開設された。社員研修施設や企業内保育所と同館で構成する8階建ての複合施設内である。2015年5月には「歴史展示フロア」を拡充してリニューアルオープンし、「技術フロア」と合わせて「歴史と技術体験型展示施設」と位置付けている。

創業者・立石一真が、1933年にレントゲン撮影用タイマーを開発したベンチャー精神に始まり、健康機器から駅の自動改札機までの技術が展示されている。創業の理念から現在社

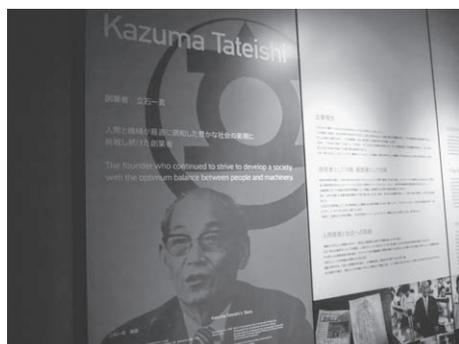


図 75 創業者・立石一真が企業理念を語る



図 76 新幹線自動改札の読み取り等の技術

会を支える技術開発までのチャレンジ精神に満ちた事業の軌跡が、立ち位置によって映像が変わるスクリーンなど、ユニークな画像を駆使した展示で五感を刺激しながら理解できるようになっている。

#### 2-4. 歴史と伝統を実感する展示内容

引き続き関西の企業博物館について、歴史と伝統を強調した展示を行っている館について述べる。

##### ① 田辺三菱製薬史料館と道修町ミュージアム他

大阪証券取引所の近くの「道修町」は、日本の製薬産業の発祥の地で、江戸から戦前までの商都・船場にある。約 300 メートルの道修町通には、「道修町ミュージアムストリート」と「田辺三菱製薬史料館」「塩野義製薬本社展示コーナー」「大日本住友製薬展示ギャラリー」「杏雨書屋」「くすりの道修町資料館」など、医薬品に関する展示施設が点在している。

「田辺三菱製薬史料館」は、2015 年 5 月、本社 2 階に開設された。館内の歴史展示は、1604 年に田邊屋又座衛門が朱印船貿易を行って薬剤を輸入した時代に遡る。1678 年に初代の田邊屋五兵衛が合薬の製造販売を家業として独立開業した。1791 年に創業した当時の軒下看板や、江戸時代の広告塔としての屋号入りの提灯、朝廷からの勅許（現代の皇室御用達）、明治時



図 77 江戸期の勅許



図 78 江戸・明治期の薬業道具



図 79 自社の歴史を展示

代の田邊屋を忠実に原寸で再現した店先などが、「くすりの道修町ゾーン」に並んでいる。「あゆみゾーン」は、基準手動天秤、薬種薬買仲間のリストなど、歴史的な収蔵品を展示している。さらに「いと未来ゾーン」には、体と薬の仕組みを体験できるようになっている。

この他、「道修町ミュージアムストリート」には大手製薬会社の本社が軒を並べている。「塩野義製薬本社展示コーナー」には、本社の1階ロビーに同社の歴史が展示されている。江戸時代の分銅の現物や大福帳の他、「絵びら」（店主がお客様に配るための広告物）や「引き札」（チラシ）なども展示してあり、華やかな色合いと図柄が美しい。「大日本住友製薬展示ギャラリー」にも、本社1階に同社の歴史が展示されているが、これは外側からしか見ることができない。さらに、武田薬品工業の旧本店だった「武田長兵衛商店ビル」は、1928年に建設された、レンガ色のタイル張りの美しい装飾で、現在は武田振興財団が入っており、1978年から貴重な医学・薬学の古典籍・掛け軸・道具類などを収蔵・展示している。「くすりの道修町資料館」は、薬の神様を祀った「少彦名神社」の敷地内に開設され、道修町に関するさまざまな保存資料を閲覧でき、パネルや大型モニターで江戸時代からの歴史を紹介する映像を視聴できる。

なお、東京には、「Daiichi Sankyo くすりミュージアム」が、2012年2月より日本橋の第一三共本社ビル内で公開されているが、ここは薬について学ぶ体験型施設で、第一製薬と三共の歴史は、小さなコーナーの展示だけだった。見学者用資料や公式サイトにも創業時の話は書かれていない。このほか製薬業界では、エーザイの「内藤記念くすり博物館」が、1971年に岐阜県各務原市のエーザイ川嶋工場内に開設されている。1977年に現在の名称に変更、1986年10月に展示館を開設した。建造物・機械・文書などの資料が経産省の近代化産業遺産に認定されている。薬用植物園では薬草を700種類栽培している。

## ② 大林組歴史館

大林組歴史館は、大阪市・北浜の旧本店内にある。船場の一角で土佐堀川沿いの一等地にあり、1926年に竣工した建物は、経産省の近代化産業遺産に登録されている。2001年10月、大林組創業110年を機に開設された。創業社主・大林芳五郎の業績と。創業時からの現代ま



図 80 主要建築物の事業実績



図 81 企業ロゴの意味と創業理念



図 82 大林組現場従業員指針（1935年）

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

で、日本の近代化へ向けたインフラ作りに、大林組の事業が貢献してきたことが伝わる展示である。見学者向け資料には、従業員や社外のステークホルダーに、自社の沿革を伝えることが目的であると書かれている<sup>2)</sup>。

### ③ 島津製作所創業記念資料館

1975年に創業100周年を記念して、創業者・島津源蔵と二代目の「遺徳を偲び開設した」(見学者用資料より)。日本銀行京都支店や京都市役所の近くにあり、創業初期に島津の住居・研究所として使われ、約45年間、本店として使用されていた建物を保存・公開している。南棟(1888年建設)と北棟(1894年建設)があり、1999年には、両棟ともに国の登録有形文化財に指定された。明治の雰囲気が漂う2階建ての木造建築で、館内には、創業以来製造販売してきた理化学器械、医療用X線装置、産業機器などが展示してある。

公式サイトに「島津製作所の源流、当時の雰囲気がここに」とある。創業の精神「科学技術で社会に貢献する」のほか、二代目の教訓として、事業の邪魔になる人は「金銭でなければ動かぬ人」「何ごとを行ふにも工夫をせぬ人」「仕事を明日に延す人」などの15カ条が展示してあり、創業時の堅実な精神が伝わる。公式サイトには学芸員ブログもあり、史料から読み取れる創業時の歴史について不定期更新している。同社研究所の田中耕一氏は、2022年にノーベル化学賞を受賞しており、創業の精神を体現したかのようだとも改めて感じた。



図 83 「創業の地」の看板



図 84 1918年開発の汎用型医療用X線装置



図 85 明治期の理化学機器

### ④ グンゼ博物苑

1996年に創立100周年を記念して、グンゼ発祥の地、京都府綾部市に歴史的な建物・機械・資料を集め、産業技術史的な資料館を建設した。「歴史蔵」には、地場産業である蚕糸業を近代的な製糸業に発展させた過程と機械・道具類が展示され、「道光庵」には、創業者・波多野鶴吉が暮らした社宅を移築し、見学者の休憩所としている。「製糸関連遺産」として経済産業省の近代化産業遺産(製糸)に登録されている。

## 2-5. 明治期の新しい生活様式を開拓した企業

次に、化粧品、石鹼、便器、ミシン、バイクなど、日本に新しい生活様式をもたらした企業博物館の展示について述べる。

### ① 資生堂企業資料館

資生堂の創業 120 周年を迎えた 1992 年に開設された。掛川市から約 2 キロ西にあり、延べ床面積 2564 平方メートルの瀟洒な建物である。創業者・福原有信が 1872 年に日本初の洋風調剤薬局を誕生させ、息子の初代社長・福原信三が事業を発展させ、現在に至る歴史が展示されている。日本初の練り歯磨きや香水などの現物など 10 万点以上の収蔵品があり、学芸員が保存・展示を行っている。

資生堂は、1916 年に「意匠部」を置き、デザインを重視して、商品パッケージやポスター・広告などを製作してきた。パッケージやビューティコンサルタントのコスチュームのほか、CM184 本、ポスターや雑誌・新聞広告 900 点の展示は見事である（CM は自由に視聴可）。1978 年に開設され、2002 年にリニューアルした。2014 年には、文化施設としての活動が評価され、静岡県文化奨励賞を受賞している。

別棟には「資生堂アートハウス」があり、東京・銀座の資生堂ギャラリーで過去に開催した「椿会美術展」「現代工藝展」に出品された美術品を保存・展示している。



図 86 化粧品事業へ進出した経緯 図 87 明治の化粧品・香水の展示 図 88 歴代のポスターや CM

### ② 花王ミュージアム

2007 年 1 月、東京墨田区の花王すみだ事業所内に開設された。展示面積は 1076 平方メートルと都内の企業博物館としてはかなり広い。館内は 3 つのテーマに分かれている。

「花王の歴史ゾーン」は、1890 年に創業者・長瀬富郎が高品質ブランドの「花王石鹼」を発売してから、毎日の生活を変えるような革新的な製品を生み出してきた過程が展示されており、録音された長瀬富郎の声を聞くこともできる。洗剤等の進化と多様化、花王商品の歴代のポスター・CM などが時代ごとに展示されている。「清浄文化史ゾーン」は、古代エジプト人の洗浄剤から、奈良・平安時代の湯あみ、江戸の町人文化と清浄感、高度経済成長と清潔の革新まで、貴重な実物と江戸の街並みを再現したジオラマなどを組み合わせて展示している。また「コミュニケーションプラザ」では、花王製品と技術の紹介のほか、スキンケ

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

アやヘアケアなどを自分で測定できる機器もある。

花王は2011年、和歌山工場に「エコラボミュージアム」も開設しており、こちらは環境に配慮したエコ技術を体験できる教育的施設となっている。

### ③ TOTOミュージアム

2017年にTOTO創立100周年を迎える記念事業の一環として、2015年8月、福岡県北九州市小倉北区の本社敷地内に開設された。「創業の精神やものづくりへの想いととも、新しい生活文化を創造してきたその歴史と進化を紹介」（公式サイトより）している。1903年に森村市左衛門が白色磁器の開発に成功し、1914年にTOTO創業者の大倉和真が国産初の腰掛式水洗便器を開発した。当時、日本ではまだ下水道が整備されていなかったが、陶器の便器によって、日本の衛生観念の定着を図り、水回り空間の生活習慣を変えていった歴史がよくわかる。その後、ユニットバスの普及やウォシュレットの開発、世界への販売拡大など、事業展開の過程も現物展示されている。所蔵品の「東洋陶器製衛生陶器と食器」は経産省の近代化産業遺産に認定されている。また、「ウォシュレット一体形便器ネオレストEX」「衛生器具等」「各種湯水混合水栓」「初代ユニットバスルーム」「光電センサー内蔵自動水栓」は、一般社団法人建築設備技術者協会より、建築設備技術遺産として認定されている。2022年8月には常設展示をリニューアルし、創業者・大倉和親の想いを紹介するコーナーを新設した。



図 89 創業者の写真と理念を展示



図 90 陶器製造に始まる事業発展の歴史



図 91 産業遺産としての認定品の数々

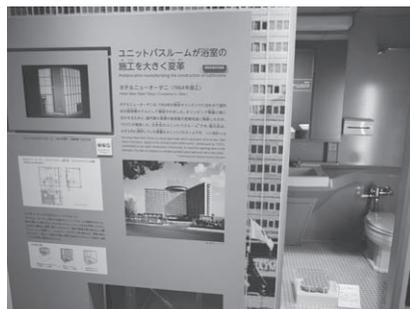


図 92 ユニットバスによる生活様式の変化

④ ブラザーミュージアム

名古屋市のブラザー工業本社ビルに近接した建物で、2005年「愛・愛知万博」に合わせて「ブラザーコミュニケーションスペース」を開館し、2018年1月に名称変更して若干リニューアルした。「ヒストリーゾーン」には、創業者の安井兼吉が1908年にミシンの修理業を開業し、息子たち兄弟が家業を継ぎ、「ミシンの国産化を実現し、輸入産業を輸出産業にする」という大志を実現し、1932年に家庭用ミシンを誕生させた過程が展示されている。ミシンを作る機械も自分たちの手で開発する、という「自前主義」がブラザーのDNAとして現在も継承されていることなどが、現物の展示とともにパネルで解説されている。工業用ミシンの進化や、タイプライターからオフィス複合機までの進化の現物展示を見ると、ブラザー工業の技術力と堅実な研究開発の姿勢が伝わってくるようだった。1928年製の「麦わら帽子製造用環縫ミシン」は、日本機学会から「機械遺産」に認定されている。また1932年製の日本初の家庭用本縫いミシン第1号「15種70型」は、経産省の近代化産業遺産に認定されている。



図93 創業の精神やエピソード

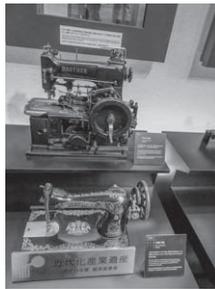


図94 家庭用ミシン第1号



図95 歴代のレジスターやタイプライター

⑤ 「カワサキワールド」(川崎重工業)

「カワサキワールド」は、神戸港に面した川崎重工業の企業博物館で、船舶、鉄道車両、航空機、モーターサイクルなど、陸海空で活躍する技術の歴史と未来が展示されてある。2006年5月、神戸海洋博物館内に開設された。9か所のゾーンに分かれており、0系新幹線、



図96 創業者と初代社長



図97 民間初の蒸気機関・国産初の潜水艇等



図98 大型ヘリコプターの内部も公開

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

船舶、ヘリコプター、バイクなどの現物が並ぶ。

見学の最初は「創業者紹介」「ヒストリーコーナー」である。創業者・川崎正三が汽船運送で富を成して造船業を始めた経緯や、松方幸次郎が乞われて初代社長に就き、戦前のパリに住み、私財を投じて松方コレクションを収集し、国立西洋美術館の基礎となったことなどが、当時の写真等のパネルで展示してあり、グローバルで文化的な視野を持って日本の重工業の基盤を発展させてきたことが伝わる。2016年10月、創立120周年でリニューアルされた。所蔵品の国産初の産業用ロボットは、国立科学博物館の重要科学技術史資料として登録されている。

#### ⑥ 石川島資料館

東京駅から約3キロ、タワーマンションが立ち並ぶ中央区佃にあり、1998年5月に開設された。IHI（旧・石川島播磨工業）の母胎である石川島造船所が1889年に設立された地であり、日本の近代的造船業発祥の地でもある（1979年に工場は閉鎖）。東京の水戸藩による事業の関連遺産として、旭日丸の模型等の資料が経産省の近代化産業遺産に認定されている。造船所の創業から現在まで、石川島・佃島の歴史や文化とともに、ジオラマで展示している。

### 2-6. 公共性の高いコレクション展示の企業博物館

印刷・紙・新聞・広告の企業博物館は、公共性を意識しており、企業名を出さない展示や、協会社で出資し合う運営が多い。しかし、貴重な歴史的コレクションを保存・展示し、業界知識を啓発する場であること、運営に企業が関わっている点は共通している。

#### ① 印刷博物館（凸版印刷）

2000年10月に、凸版印刷100周年記念事業の一環で、東京・飯田橋駅近くの本社敷地の地下スペースに設立された。印刷文化に関わる資料の蒐集や研究活動、活版印刷などの印刷を実体験するなどの実践・啓蒙活動を行っている。2005年に国立西洋美術館館長の樺山紘一氏を館長に迎え、展示室には社名を一切出さず、学芸員を配置し、公共性の高い博物館となっている（2021年10月より館長は凸版印刷会長が兼務）。世界最古の印刷物「百万塔陀羅尼」、西洋式活版印刷の祖であるゲーテンベルグの「42行聖書」、江戸末期の杉田玄白の「解体新書」など、多数の貴重なコレクションが常設展示されており、展示面積は1770平方メートルに及ぶ。活版印刷を体験できる工房もあり、筆者は何度かゼミ見学で学生と訪れているが、活字とインテル（空きの調整具）をセットし、紙をプレスして印刷する工程は、まさに「印刷」を体感できる施設である。

同じ建物の2階には凸版印刷ショールームとしての「PLAZA21」があり、凸版印刷の最先端の技術が展示されており、もはや印刷とは紙だけではないことがよくわかる。ここは一般公開はされていないが、入口部分に1900年の創業からの歴史も年表で展示されており、通常の企業博物館のような導入部となっている。

なお、業界2位の大日本印刷も、市谷の本社近くに「市谷の杜 本と活字館」を開設し、2021年2月より一般公開している。同社の前身の一つである「秀英舎」の建物を大正末期の竣工時の姿に復元した。金属製の活字を使った活版印刷の技術展示と会社や印刷の歴史紹介、印刷や製本の作業を体験できる場も設けている。

② 竹中大工道具館（竹中工務店）

竹中工務店の創立85周年を記念して、1984年7月に神戸に開館した。2014年10月には開館30周年を迎えて新神戸駅から徒歩圏の、同社ゆかりの地に移転した。大工道具を民族遺産として収集・保存し、さらに研究・展示を通じて、日本の建築文化を後世に伝えていくことを目的にしている。これまでに収集した資料は、大工道具1万8000点のほか、文献資料などを含めて3万5000点に及ぶ。公益財団法人竹中大工道具館の運営で、館内には竹中工務店の名称は一切ない。日本の工匠の技と心を後世に伝えることを目的としている<sup>3)</sup>。

館内は、先史時代から近代までの道具の歴史と建築史が、大型模型と絵巻物が並び、タッチパネルの動画映像などで面白く展示されている。建築資材となる木の良さを引き出す匠の技や、多様な道具類、和の伝統美などが、木や道具を触って体感しながら理解できるように



図 99 木の種類でカンナ屑の香りが違う



図 100 ノコギリの種類を解説する館長（当時）



図 101 (左) 吹き抜け空間の唐招提寺金堂の柱と組物を再現したもの

図 102 (右) 木の門構えの入口から庭園が館まで続く

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

なっている。準備に携わった坂本（2019）は、「五感に響く新たな展示をつくりたいと、唐招提寺の柱の実物大模型（7メートル超）や木の香り、刃先の手触りなどの展示方法にこだわった」と述べている。

本館で所蔵している「鑿（ががり）」「鉋刃（かんなば）」などの大工道具は、「伝統建築工匠の技／木造建造物を受け継ぐための伝統技術」として、2020年に国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された。宮大工や左官職人らが継承してきた17分野の技術の価値が世界的に認められ、能楽や和食などに続く国内22件目のユネスコ無形文化遺産となったのである。古い大工道具を保存・展示してきた本館の功績は大きいと思われる。

## 2-7. 鉄道に関する電鉄系博物館

次に展示面積が最も広い鉄道系の博物館の系譜をたどっていく。交通インフラの歴史は公共性が高いため、創業者精神や企業理念というよりも、車両の現物展示と運転シミュレータなどの体験施設が中心となっている。鉄道好きにとっては垂涎の車両群であり、子供たちが遊びながら学ぶ場としても活用されており、国の重要文化財となっている設備もある。

### ① 鉄道博物館（JR 東日本）

日本最初の「鉄道博物館」は、1921年に鉄道開業50周年を記念して東京駅北口に期間限定で開館され、1936年に神田の万世橋へ移転した。1971年に財団法人・交通文化振興財団に運営を委託しているが、国鉄民営化に伴い、1987年に東日本旅客鉄道（JR 東日本）が継承し、2006年5月に閉館した。

これを引き継ぐ形で、JR 東日本の創立20周年記念事業のメインプロジェクトとして、2007年10月の鉄道の日、「鉄道博物館」が埼玉県さいたま市に開館した。公益財団法人東日本鉄道文化財団が運営している。2018年7月には新館の落成と本館の改修が完成し、リニューアルオープンした。延床面積は2万8200平方メートルと日本最大規模となり、館内を車両・歴史・仕事・科学・未来の5つのコーナーに分け、鉄道の歴史を体験できる。蒸気機関車から新幹線まで、41両が展示されており、運転シミュレータや指令業務の体験もできる。「一号機関車」（1871年英国製）は、1997年に国の重要文化財（美術品）の指定を受けている。

### ② 交通科学館（JR 西日本）

関西では、大阪環状線全通記念事業として、「交通科学館」が1962年1月に開館した。1964年3月に博物館法29条に定める「博物館相当施設」の指定を受けている。1970年より、東京と同じように交通文化振興財団に運営が委託され、民営化後はJR 西日本とJR 東日本が共同で引き継いだ。2009年よりJR 西日本の単独管掌となった。しかし老朽化が進んで2014年4月に閉館。その後継施設として、2015年8月に閉館した「梅小路蒸気機関車館」を拡張リニューアルする形で、2016年4月に現在の「京都鉄道博物館」が開設された。JR

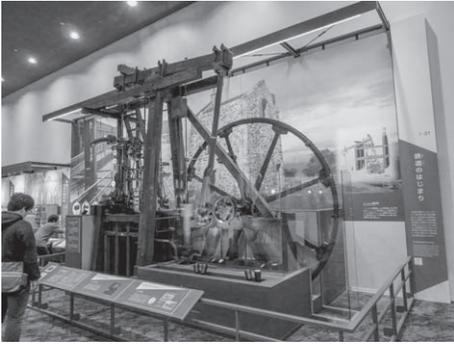


図 103 初期の鉄道の蒸気機関



図 104 梅小路蒸気機関車がアーチ状に並ぶ



図 105 鉄道の駅や新幹線車両ゼロ系を展示



図 106 歴史的ヘッドマークや運転士の制服

西日本が交通文化振興財団に運営を委託している。

基本コンセプトは「地域と歩む鉄道文化拠点」で、「鉄道を基軸とした事業活動を通じた地域の活性化に貢献する」という基本ミッションを掲げている。特に京阪神を中心とした鉄道の発達過程について、当時の車両部品を現物展示して詳細に展示されている。こちらも蒸気機関車から新幹線まで、53両の車両と鉄道施設が並び、鉄道ジオラマや運転シミュレータなどがあり、「見る、さわる、体験する」施設である。「梅小路機関車庫」は、1914年築で日本最古の鉄筋コンクリート造りの機関車庫で、扇形車庫、転車台、20線の引込線は、国の重要文化財、土木学会選奨土木遺産になっている。延床面積は1万8800平方メートルだが、屋外のオープンスペース（ミニ機関車に乗って敷地内を走れる）も含めた展示面積は3万平方メートルを超える。

### ③ リニア・鉄道館（JR 東海）と九州鉄道記念館（JR 九州）

また愛知県名古屋市には、JR 東海が運営する「リニア・鉄道館」があり、2011年3月14日に開設された。高速鉄道技術の進歩を紹介することを目的としており、歴代の新幹線39両を展示している。

このほか福岡県北九州市には「九州鉄道記念館」があり、2003年8月9日に開館した。JR 九州の所有で、「九州鉄道記念館運営共同企業体」に運営を委託している。2007年11月

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

には、本館（旧九州鉄道本社）が近代化産業遺産（北九州炭鉱－筑豊炭田からの石炭輸送・貿易関連遺産）に認定され、2014年には国の登録有形文化財に登録された。

#### ④ 東武博物館

私鉄系の博物館としては、「東武博物館」が、東武鉄道の創立90周年を記念して、1989年5月に開設されている。2009年に開館20周年を迎えてリニューアルした。現在の東京スカイツリー（東武グループが事業運営）に近い場所にあり、一般財団法人として運営されている。蒸気機関車から始まり、多数の実物車両が展示してあり、シミュレータなどもあって、小さい子供が楽しめるようなファミリー向けの体験型展示になっている。東武鉄道という企業の歴史のコーナーも設けられているが、見学者用資料や公式サイトには記載されておらず、館の目的ではないと考えられる。

#### ⑤ 地下鉄博物館

「地下鉄博物館」は、1986年に開設され、2000年にリニューアルした。地下鉄葛西駅の高架下にある。東京メトロの関連公益法人である公益財団法人メトロ文化財団が運営している。東京メトロ銀座線等の展示物は、経産省の近代化産業遺産に認定されている。銀座線開通時の上野駅ホームの再現や、実物車両の展示や運転シミュレータがある。

#### ⑥ 京急ミュージアム（京浜急行）とロマンスカーミュージアム（小田急）

近年相次いで2つの私鉄博物館が開館した。まず、京浜急行電鉄が2020年1月、横浜市の本社敷地内に「京急ミュージアム」を開館した。真っ赤な車両「デハ230形デハ236号」は1930年に運行を始め、現在の京急の礎を築いた実車で、建物の外部からも目立つように展示されている。運転体験や車両工作も体験できる。小田急電鉄も2021年4月、海老名に「ロマンスカーミュージアム」を開館した。歴代の特急ロマンスカーのほか、1927年の小田原急行鉄道（小田急電鉄の前身）開業時に運行していた車両も展示している<sup>4)</sup>。

以上のように、鉄道の博物館は、公共インフラとしての発達を見せる場であり、歴史的に重要な価値のある車両を展示することが目的となっている。

なお、乗り物系としては、羽田空港内にある日本航空の「スカイミュージアム」も、2013年7月に開設された。飛行機の仕組みや、航空整備士や貨物スタッフなど空港スタッフの仕事を体験し、格納庫で機体を見る。しかし歴史については、機体の変遷と「航空文化史」の展示のみである。2021年12月にリニューアルし、2022年5月より見学再開した。

## 2-8. 業界知識の啓発型の企業博物館

自社の技術や歴史ではなく、業界の歴史や先端の技術を展示している、いわば「業界知識の啓発型」の展示内容についても概観しておく。

### ① 東芝未来科学館：東芝

川崎駅前の大型商業施設に隣接した、東芝スマートコミュニティセンターの中にある。前

身は1961年開設の「東芝科学館」で東芝研究開発センター内にあったが、2014年1月に現在の場所に、名称を変えて新設された。最先端のデジタル技術や持続可能なエネルギーなど、最先端の情報を展示し、それらの技術を体験的に楽しめるコーナーのほか、創業期からの日本初、世界初となった多数の東芝製品の歴史を紹介している。見学者用資料には、「科学の楽しさに触れてほしい」「電気産業の歴史を体感してほしい」「最先端技術を体験してほしい」とある。「ヒストリーコーナー」には、国の重要文化財で機械遺産にも指定された万年自鳴鐘（レプリカ）や日本初の白熱電球なども展示されている。歴史コーナーでは、戦前に東芝が2社の合併で成立したことから、2社の創業者精神は別物であることが感じられる。「芝浦製作所」の創業者・田中久重は、からくり人形や万年時計の精巧な江戸職人技術を持っており、「東京電気」の創業者・藤岡市助は、工部大学校（現在の東京大学工学部）の教授を経て、政府の養成によってアメリカを視察して東京電燈を設立した。この2社の職人気質と公共的な使命感が併存した展示で、他館のような一途な企業使命は感じられなかった。館名の通り、未来の技術を親しみやすく伝える目的の施設だと考えられる。

## ② 三菱みなとみらい技術館：三菱重工業

横浜市のみなとみらい駅近くに、1994年6月に、「明日を担う青少年たちが科学技術に触れ、夢を膨らませることのできる場」として設立された。三菱重工業が運営しており、三菱グループの技術やものづくりを実物・模型を通して紹介する場となっている。宇宙のロケット、国産ジェット旅客機、有人深海調査船などが展示されているが、創業の理念などを紹介するコーナーはない。

## ③ NTT 技術史料館（NTT グループ）

日本電信電話公社の発足以降を中心に、NTTグループの電気通信技術開発の歴史的資産を系譜化したもので、2000年11月に開館した。武蔵野研究開発センター内にあり、一般公開日は週2日程度である。展示は2部構成で、通信の歴史をたどる部分と、技術発展の系譜を展示・解説する部分がある。NTTの元技術者が嘱託でガイドにあたるなど、貴重な展示物を技術面から詳しく解説してくれる。展示面積7000平方メートルの3階建てで、1890年



図 107 明治期からの技術開発の系譜



図 108 真空管を学ぶ装置



図 109 業界の発展の歴史

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

の電話創業に始まり、モールス電信などの体験展示も楽しめる。基本は技術と通信機の歴史で、創業の精神などはなく、通信技術の発展を学ぶ場である。

#### ④ まほうびん記念館：象印マホービン

大阪市北区の象印マホービンの本社1階にあり、2008年に創業90周年を記念して開設された。2018年には創業100周年に合わせてリニューアルした。真空技術を応用して「お湯が冷めない魔法の瓶」が開発されてからの現物展示や、当時のテレビCMを見ていると、日本の生活文化が豊かになっていった過程がわかる。創業者の市川兄弟について紹介したコーナーもある。元館長の栗津（2013）は、企業博物館は、企業が多様なステークホルダーとの確なコミュニケーションをとる上でのコンテクトポイントであると指摘している。

#### ⑤ INAX ライブミュージアム

愛知県常滑市にあり、旧INAX（元・伊奈製陶／現在はLIXILグループ）の「土とやきものの魅力を伝える文化施設である。1921年建造の土管工場で、1971年まで実際に工場として使われていた建物を、1986年に伊奈製陶からINAXへ社名変更した際にミュージアムとして開設した。1997年には国の登録有形文化財（建造物）に登録、2007年には経産省の近代化産業遺産に認定された。「世界のタイル博物館」など6館あり、「観て、触れて、感じて、学び、創りだす」と見学者用資料に記載されているように、体験・体感型の施設である。装飾タイルや建築陶器の歴史が現物展示されており、体験教室もある。建物の老朽化のために2016年から保全工事を実施していたが、2019年10月にリニューアルオープンした。地元住民との交流の場として活用されているが、創業者や創業の経緯については一切展示されておらず、経営統合で社名が変更したにもかかわらず、旧社名の館名のままである。

#### ⑥ 容器文化ミュージアム：東洋製罐

JR山手線の五反田駅と大崎駅の間地点に位置し、東洋製罐本社内の1階にある。2012年4月、「地域の方をはじめ広く一般の方々に、容器包装が生み出した文化を理解して頂き、親しみを持って頂けるよう」（公式サイトより）開設された。展示内容は「容器」の原料やリサイクル、缶詰ラベルなど、「容器包装の文化を発信するミュージアム」（見学者用資料より）であるため、創業精神や会社の沿革は展示されていない。入口には約100年前の自動製缶機（インバーテッドボディメーカー）が展示してあり、これは国立科学博物館の「重要科学技術史資料（未来技術遺産）」として登録されている。

#### ⑦ 紙の博物館

1950年6月、「洋紙発祥の地」である東京都北区の王子に設立された。近代製紙工場であった王子製紙の工場跡地である。戦後、占領政策で王子製紙が3社に分割されたのを機に、紙業の史料を一般公開して社会教育に貢献するため、電気室の建物を利用して「製紙記念館」が設立された。その後、場所を移転し、1998年に北区の「飛鳥山3つの博物館」の1つとしてリニューアルオープンした。日本の伝統的な「和紙」と、近代日本の経済発展を支

えた「洋紙」の両面から、紙の歴史・文化・産業を紹介し、4万点の資料と1万5000点の図書を保管して展示公開している。巨大な「ポロ蒸煮釜」など、明治初期から国内工場で実際に稼働していたパルプ製造機など、貴重な産業遺産もある。製紙関連の所蔵品が経産省の近代化産業遺産に認定されている。2020年6月に創立70周年を迎えてリニューアルした。現在は公益財団法人紙の博物館となり、製紙会社など約170社の協力で運営されている。

#### ⑧ Gas Museum (ガスミュージアム) とガスの科学館 (東京ガスネットワーク)

「Gas Museum (ガスミュージアム)」は1967年、東京・小平市に開設された。2つの建物があり、「ガス灯館」は、明治42年建築の東京ガス本郷出張所の建物を移設復元した、レトロな赤レンガの洋館で、明治の初めにガス灯が灯って以来の歴史を展示している。「くらし館」も同じ外観で、都市ガス事業によって、台所や風呂・暖房が進化してきた経緯が展示されている。2022年に文化庁から「食文化ミュージアム」として認定された。国策のインフラ事業なので、創業者の想いや企業理念などは展示されていない。

東京ガスの施設としては、「ガスの科学館 (がすてなーに)」が東京・江東区の豊洲公園近くにある。1986年に東京ガスの創立100周年を記念して豊洲に開設された。2006年に少し場所を移転して現在に至る。ガス・エネルギーの特長や温暖化などの社会課題について、子供が楽しみながら学べる施設である。筆者が調査訪問した日は、幼稚園児がバスで見学に来ていた。大人向けのクイズなどの用紙もあるが、基本は低学年の学校見学用である。

#### ⑨ 物流博物館 (日本通運)

東京・港区高輪にあり、1958年に大手町の日本通運本社内に設置された通運史料室を前身としている。1987年からは「物流史料館」となり、1998年8月には「物流博物館」と改称して現在の場所に移転した。公益財団法人利用運送振興会に運営を委託している。

江戸から昭和までの物流の歴史や史料、写真、模型などを展示し、天秤棒や米俵をかつぐこともできる。現代の物流ターミナル(空港、港湾、鉄道・トラックの各ターミナル)の一日をジオラマで再現した展示室もある。収蔵資料の多くは日本通運の所有する資料で、文書史料約6,000点、美術工芸資料約200点、実物資料約1,000点、写真資料約10数万点、映像資料約200点を収蔵している。

#### ⑩ 写真歴史博物館 (富士フィルム)

東京・六本木の東京ミッドタウンにある「FUJIFILM SQUARE (フジフィルム スクエア)」の施設内にあり、2007年に開設された。富士フィルムが運営しており、フォトサロンやミニギャラリーもある。富士フィルムの歴代カメラが展示され、写真の文化やカメラの歴史的進化を見ることができ、企業の沿革は展示されていない。

#### ⑪ ゼンリンミュージアム (ゼンリン)

「ゼンリン地図の資料館」として、北九州市小倉のビジネス街に2003年7月に開設された。ヨーロッパ中世の地図で大航海時代が始まったことなど、地図のロマンを感じさせる場であ

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

り、この技術がカーナビに活用されていることもわかる。館内床面には伊能中図（原寸）があり圧巻である。その他、約120点の地図を常設展示している。2019年11月に閉館したが、2020年6月には、「ゼンリンミュージアム」としてリニューアルし、展示面積を拡充した。

#### ⑫ ニュースパーク（日本新聞協会）

日本で初めての日刊新聞が創刊された地にちなみ、2000年10月、横浜に開設された。新聞・ジャーナリズムの役割や新聞が届くまでの仕組みを学べる施設である。個別新聞社の企業情報が展示されているわけではない。

#### ⑬ アドミュージアム（電通）

電通の4代目社長の吉田秀雄の生誕100年を記念し、2002年12月に東京・汐留に本社ビルを移転した際、隣接ビルに開設された。運営は公益財団法人・吉田秀雄記念事業財団で、広告の歴史的コレクションの展示と専門図書館があり、企業名は出していない。

### 2-9. 移転・改装・閉館など博物館の盛衰

企業博物館は何度もリニューアルされ、展示内容も変わっていく。最後に、近年、新設・移転・改装した館と、移転予定の館・閉館した館についてまとめておく。いずれも創業者の歴史を伝える施設である。

「ヤマトグループ歴史館 クロネコヤマトミュージアム」は、ヤマトグループが創業100周年を迎えた2019年11月に、同社の集積センターのある品川の港南ビル内に開設された。3フロアに分かれた館内を下りながら歴史を辿る。創業から現在までを4つの時代で構成し、街並みや営業所、社会や生活者の様子などを視覚展示し、経営者や社員の思いに触れることで、企業の成長を追体験するというコンセプトである。

「セイコーミュージアム」は、1981年に創業100周年記念事業として「時と時計」の資料・標本の収集・保存と研究を目的として設立された。2012年にはリニューアルが行われ、セイコーの歴史・製品の展示内容を拡充した。当初は東京・向島にあったため、一般見学には不便でスペースも狭い印象だったが、2020年8月、創業者・服部金太郎生誕160周年を記念し、創業の地である銀座に移転し、地下1階から5階までの大型館となった。「東洋の時計王」と呼ばれた服部金太郎の奉公から独立、そして事業発展への足跡を辿り、「常に時代の一步先を行く」という創業精神や、クォーツ時計誕生の歴史などを紹介している。また、時と時計に関する約500点が展示されており、日時計から始まる世界の時計の歴史や、日本で独自に発展した江戸時代の和時計コレクションの展示なども充実している。

「森村・大倉記念館 CANVAS」は、ノリタケカンパニーリミテド（旧・日本陶器）の創立百周年記念事業の一環として、森村グループ4社（リタケカンパニーリミテド、TOTO、日本ガイシ、日本特殊陶業）が共同で建設・企画し、ノリタケ本社の敷地内に2005年3月に閉館した。近代陶業発祥の地として、赤レンガの建物（工場として1975年まで稼働）が

経産省の近代化産業遺産に認定された。森村グループの創設者・森村市左衛門の海外貿易への志と、森村組を企業集団へ発展させた大倉孫兵衛の信念など、「創業の理念」を強調した展示で体験施設もあったが、2014年3月に閉館している。その1年後、同じ「ノリタケの森」の敷地内に、歴史や事業内容を展示する「ノリタケウェルカムセンター」、洋食器の歴史や製造工程の見学・体験を行う「ノリタケクラフトセンター&ノリタケミュージアム」が、開設された。

東京・恵比寿ガーデンプレイス内にある「エビスビール記念館」は、エビスビール誕生120年の節目として恵比寿工場跡地に2010年2月に開設された。サッポロビールが運営している単独商品のブランドを冠した記念施設で、歴史を伝えるコーナーがあったが、2022年10月末に閉館した。2024年春には新しい体験型施設を開く予定である。

「ニコンミュージアム」は、東京・品川駅前の本社ビル内にあり、2017年7月に創立100周年を記念して開館した。ニコンの歴史や、製品・技術が展示されており、合成石英ガラスインゴットに始まる、光学ガラスの技術が多くの特産品とともに展示されている。カメラメーカーとしては初の博物館で、マニアの間では垂涎の技術展示だという。ミニシアターでは、100年の歴史が映像で見られるようになっている。2024年の本社移転時に移設予定である。

また、「ユニチカ記念館」は、兵庫県尼崎市にあり、現存する最古の洋館として国の近代化産業遺産に選定されている。1900年、繊維大手ユニチカの前身「尼崎紡績」の本社事務所として完成した英国式れんが造りの2階建て建物である。1959年6月に日紡記念館として開設され、1964年ニチボー記念館となり、1969年の会社合併（旧尼崎紡績は大日本紡績となり日本レーヨンと合併）で現在の名称になった。経済産業省の「近代化産業遺産」や県の「景観形成重要建造物」に指定されており、館内には同社の歴史的資料が展示されていた。NHK連続テレビ小説『あさが来た』（2015年10月～2016年3月放映）ではユニチカ初代社長の広岡信五郎氏がモデルとなったが、現在は休館中で、老朽化のため解体を検討中である。

「ソニー歴史資料館」は、東京都品川区の御殿山の「ソニー通り」と呼ばれた旧本社エリアの「井深会館」内にあった。ここはソニー社友会（OB会）の拠点でもある。2007年4月に開館し、ソニーの代表的な商品約250点のほか、商品開発にまつわる技術やエピソードを展示していたが、2018年12月に閉館した。ソニースピリットの原点といわれる設立趣旨や、創業者の井深大、盛田昭夫らのインタビュー映像などがあり、筆者が調査訪問した際は、ソニーグループの社員が取引先の数人を案内していて、創業者の映像の前で記念撮影をしていた。また、同じソニーの体験型ミュージアムの「ソニー・エクスプローラーサイエンス」も2002年にお台場に開館したが、2019年10月に閉館した。

### 3. まとめ

これまでの考察で、多くの企業博物館が、自社の所蔵する事業製品を保存・展示していること、創業者精神や企業理念を視覚的に展示していることを明らかにしてきた。経産省の近代化産業遺産に認定されたような製品・技術のほか、日本人の生活様式を変えてきたような製品サービスも、系統だって保存・展示・公開しており、社会的意義もある。同時に、創業者精神や企業理念などの抽象的な概念を視覚的に展示することで、ステークホルダーに訴求している企業博物館が多いことも示した。過去の企業博物館に関する多くの研究は、個別館の展示内容の定性的な分析か、定量的なアンケートによる来館者特性かであり、これだけ多数の施設を調査訪問し、展示内容の歴史的価値について網羅的に検討した研究はほとんどない。本論文は、多数の企業博物館の調査によって、個別の企業博物館の歴史的な所蔵品を保存・公開し、創業者精神をステークホルダーに伝えることについて、マクロ的な社会価値と、ミクロ的な広報の利点という両面から考察したことに意義があると考えている。

企業博物館は、現地に行き展示物を見ることで、壮大な企業の歴史を実感できる。製品の現物に触り、動く機械の音を聞き、香りをかぎ、ときには味見をする。まさに視覚や聴覚、触覚や嗅覚や味覚という五感で企業を感じるコミュニケーションの「場」である。歴史的産業物や創業者精神という「レガシー」を見せることで、企業理念に沿って持続的に事業運営を続けてきた証をメッセージとして発信している。従業員の精神的拠点となるだけでなく、歴史的なストーリーが対外的な企業のブランド力を高めている。

近年の消費者は、製品サービスの便益や売価を単独で評価するのではなく、生産している企業のSDGsや環境経営に対する取り組み、ひいてはサプライチェーンへの配慮やコンプライアンスに対する姿勢などを意識する傾向があり、総合的なレピュテーションや信頼性を獲得することが必要だといわれている。経営戦略の一つとして、製品差別化を行う上でのナラティブマーケティングは選択肢の一つとされ、モノにまつわる物語性が付加価値をつけ、ロイヤルティの高いブランドに育つと考えられるようになった。企業博物館で社の沿革や創業時の苦勞を知り、産業遺産の現物や創業者精神の展示物を見て解説を聞けば、「企業ストーリー」は理解しやすいし、伝統や格式といったステータスが印象づけられる。経営戦略で、「語り」を通してアプローチするナラティブマーケティングに通じるコミュニケーション手法といえよう。今回は本題でないのであまり触れなかったが、工場見学や体験型施設で、調理体験やバーチャルクイズなど、エンターテインメント性が高い施設は「親近感」を演出しており、大人も童心に帰って主力商品への理解を深められる。こういうコンセプトの館は、教育的価値と広報的利点が併存しているといえよう。

企業博物館の調査を始めて見て、その管轄が広報部やコーポレート・コミュニケーション

部であることが多いことに改めて気づいた。それは、企業博物館がB2C企業の消費者体験の場に留まらず、B2B企業においても、従業員、取引先、投資家、地域住民など、さまざまなステークホルダーに自社の歴史や創業の精神を「見せる場」となっているからである。商談に使われるようなショールームとも、工芸美術品のコレクションを誇示する美術館とも異なり、本業に立脚した展示内容によって事実を伝えるという意味で、まさに企業博物館は広報的な自社メディア (Owned Media) といわれる所以である。さらに、経済産業省の各経済産業局の公式サイトには、見学可能な企業博物館の一覧が、外国語ガイドの有無なども含めて掲載されており、日本の観光資源というマクロ的な視点でも着目されていることがわかる。

全国の企業博物館の調査訪問を始めてから数年が経過したが、館のコンセプトは多彩であり、なかなか研究論文としてまとまらず、行けば行くほど資料と写真と談話原稿がどんどんたまる一方だった。しかも調査訪問をほぼ終えた頃にコロナ禍となり、全国の博物館と同様に企業博物館も一斉に一時休館してしまった。徐々に見学が再開されたので、産業遺産の保存・公開と創業者精神の展示に論点を絞り、調査当時の展示や談話を基本として論を進めた。時間が経過してしまったので、現状を公式サイトで確認し、大規模なりニューアルがあった館については、その旨を記している。なお、公式サイトにバーチャル見学の動画の掲載を始めた企業博物館もあるが、まだ少数であり、現場の迫力には及ばないことから、本稿では触れていない。また各施設の情報については、立地は企業の沿革に関わるし、創設の経緯 (周年事業や生誕記念など) は重要だと考えて記載したが、開館時間や入場料の有無等は記載していない。予約が必要で一斉見学の館や、フリーの見学が自由の館など、見学方法も館によって異なるが、コロナ禍で逐次変更されているので記さなかった。

日本の企業博物館は、工場見学併設型やアミューズメント重視の体験施設を含めると、全国で200館を超えるといわれている。また次々とリニューアルされるので、一度訪問調査しても、すぐに新しい展示方法に変わっていき、調査には終わりが無い。したがって本論文も、全国全ての企業博物館の現状を完全に反映したとは言い難いが、少なくとも現地調査を重ね、産業遺産の展示や創業者精神の伝達にメッセージ内容を絞って考察したことで、今までにない角度での研究分析ができたのではないかと考えている。

#### 注

- 1) 1972年に大阪府文化振興研究会が提唱し、1979年には大阪府が文部省に設置を正式要請し、資料を収蔵する場所を万博記念公園内に用意した。大阪商工会議所、大阪工業会、日本産業技術史学会、大阪府などを中心に誘致活動が行われ、1988年には「国立産業技術史博物館 (仮称) 構想」が発表されたが、バブル崩壊による大阪府の財政難等で、1997年に誘致促進協議会は活動を停止。2009年、収集されていた大量の資料を廃棄処分することを決定して解散し

た。

- 2) 「大林組社員がその潮流の先頭波にあることをあらためて自覚し、同時に社外の多くの皆様に、当社の伝統に培われた仕事、創業以来の『志』と『責任感』と『未来指向』を出自としていることを、知っていただく機会としたいと願うものです。」
- 3) 館長の赤尾建蔵氏は、竹中大工道具館の30周年記念誌『木の文化を守る匠の技と心』で、「国内で唯一、大工道具を専門とする博物館であり、道具を使う、あるいは道具をつくる工匠たちの技と心を後世に伝えることを使命としております。(中略)日本にしかない、そして決して絶やしてはならないこの尊い手仕事の技を、より多くの方々に伝えていきたい」と述べている。
- 4) かつて「小田急鉄道資料館」が向ヶ丘遊園内にあったが、2002年3月に閉園した。

#### 参 考 文 献

- Danilov, V.J. (1991) Corporate Museums, Galleries, and Visitor Centers, Greenwood Press
- 栗津重光 (2013) 「企業博物館の役割—新たなコンタクトポイントの知覚—」『AD STUDIES』Vol. 46, pp 28-32
- 栗津重光 (2015) 「企業博物館が企画展を開催する意義」日本展示学会誌「展示学」第52号 pp 84-93
- 伊木稔 (2016) 『文化を支えた企業家たち』ミネルヴァ書房
- 井上敏・野尻亘 (2004) 「産業考古学と産業遺産—何のために情報を収集し、誰に伝えるために保存するのか—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第30巻第2号 pp 61-90
- 駒橋恵子 (2017) 「企業博物館の Owned Media としてのストーリー発信について—企業理念やナラティブを共有する—」『経済広報』2017年3月号 pp 8-10
- 小泉智佐子 (2019) 「資生堂企業資料館における企業資料の収集・活用の取り組みと課題」『情報の科学と技術』69巻第2号 pp 68-72
- 坂本忠規 (2019) 「五感に響く展示で情報を伝える—竹中大工道具館の取り組み—」『情報の科学と技術』69巻第2号 pp 78-83
- 白石弘幸 (2016) 『脱コモディティへのブランディング』創成社
- 高柳直弥 (2011) 「企業博物館の成立と普及に関する考察—欧米からの Corporate Museum 論の移入を中心に—」『大阪市大論集』第128号 pp 47-68
- 高柳直弥・栗津重光 (2014) 「インターナル・コミュニケーションの道具としての企業博物館と企業アイデンティティ」『広報研究』第18号 pp 50-64
- 高柳直弥 (2015) 「企業博物館の価値創造活動とそれらが企業および社会にもたらす効果に関する考察」『経営研究』第66号第3巻 pp 89-105
- 高柳直弥 (2015) 「企業のコミュニティ・リレーションズにおける企業博物館の活用に関する考察」『広報研究』第19号 pp 32-47
- 高柳直弥 (2019) 「企業のコミュニティリレーションズにおける企業博物館活用の実態」『広報研究』第23号
- 高柳直弥 (2019) 「企業博物館の運営と資料管理」『情報の科学と技術』69巻第2号 pp 62-67
- 高柳直弥・栗津重光 (2021) 「企業博物館における娯楽とコーポレート・コミュニケーションの両立に関する考察」『広報研究』第25号 pp 32-47

- 武田竜也 (2009) 「日本の産業博物館の現状と課題—産業観光と地域活性化の視点から—」『日本感性工学会論文誌』 Vol. 8 No. 4 pp 1179-1185
- 竹中克久 (2012) 「組織の使命と企業博物館—原子力発電展示が生み出す情報弱者—」『情報コミュニケーション研究』 第 12 号 pp 1-12
- 鳥居敬 (2013) 「BtoB 製造業のコーポレート・コミュニケーションにおける企業博物館に有効性」一般社団法人日本 BtoB 広告協会 『BtoB コミュニケーション』 2013 年 3 月号 pp 2-8
- 中牧弘允・日置弘一郎 (2003) 『企業博物館の経営人類学』 東方出版
- 中牧弘允 (2015) 「企業博物館の視点から」立命館大学社会システム研究所編 『社会システム研究』 pp 219-226
- 日外アソシエーツ編集部編 (2003) 『新訂 企業博物館事典』 日外アソシエーツ編集部
- 中嶋康博他 (2016) 「工場見学がファンをつくる」日本経済新聞出版社
- 平井仁典 (2012) 「企業ミュージアムにおける基本的性質の分析」『共栄大学研究論集』 第 10 号 pp 141-155
- 星合重男 (2004) 「日本の企業博物館の動向について」『レコード・マネジメント』 No. 48 pp 60-62
- 町田小織 (2020) 日本における企業博物館とその多様性に関する一考察—計量テキスト分析による類型化と可視化を通して—『博物館学雑誌』 第 46 巻第 1 号 p 111-129
- 光岡寿郎 (2010) 「なぜミュージアムでメディア研究か」『マスコミュニケーション研究』 76 巻 pp 119-137
- 村田麻里子 (2014) 『思想としてのミュージアム—ものと空間のメディア論』 人文書院
- 村橋勝子 (2002) 『社史の研究』 ダイヤモンド社
- 諸岡博熊 (1995) 『企業博物館—ミュージアムマネジメント』 東京堂出版
- 矢崎陽子 (2013) 「これからの企業ミュージアムの役割」『日本経営倫理学会誌』 第 20 号 pp 263-275
- 経済産業省 「近代化産業遺産群 33 / 続 33—近代化産業遺産が紡ぎ出す先人達の物語」  
[https://www.meti.go.jp/policy/mono\\_info\\_service/mono/creative/kindaikasangyoisian/pdf/isangun\\_zoku.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/kindaikasangyoisian/pdf/isangun_zoku.pdf)
- 経済広報センター編 (2001) 『企業の博物館・科学館・美術館ガイドブック』
- 経済広報センター 「マツダミュージアム」『経済広報』 2022 年 9 月号 p 22
- 帝国データバンク史料館編 (2013) 『別冊 MUSE 産業文化博物館』
- 電通編 (1984) 『日本の企業博物館』 電通
- 『竹中大工道具館 30 年の歩み 1984-2014』
- 日本広報学会・広報事例研究会編 (主査・駒橋恵子 / 2017) 『企業博物館の事例研究：企業広報のケーススタディ 第 6 期報告書』 日本広報学会
- その他、各企業博物館の公式サイト、各企業の企業博物館に関するニュースリリース、各企業博物館のある自治体の公式観光サイト、各企業博物館に関する新聞掲載記事、各博物館の見学者向け資料、博物館のゲスト用非売本等

## 謝辞

訪問調査の際は、以下の館長または広報部の博物館担当者にインタビューをさせていただいた。紙幅の都合で話の内容を書ききれず、撮影した写真もごく一部しか掲載できなかった

企業博物館での産業遺産の公開と創業者精神の展示における社会的意義と広報的利点

が、最後に氏名を記して深く謝意を表明したい。トヨタ産業技術記念館の飯島修館長、ヤマハコミュニケーションプラザ館長の大隅哲雄氏、パナソニックミュージアムの山田昌子館長、松下幸之助歴史館の鴻上恵一館長、花王ミュージアムの丸太誠一館長、資生堂企業資料館の石井光学館長、まほうびん博物館の山口己年男館長、月桂冠大倉記念館の西岡成一郎館長、竹中大工道具館の赤尾建蔵館長、UCC コーヒー博物館の山岡昭雄館長、TOTO ミュージアムの大出大館長、ニッカウキスキー北海道工場総務部の森田利幸氏、安藤スポーツ・食文化振興財団の荒金善一氏、江崎グリコグループ広報室江崎記念館担当の石橋達二氏、田辺三菱製薬広報部の西巻吉昭氏、川崎重工業コーポレートコミュニケーション部長の鳥居敬氏に、深く感謝申し上げます（全員の肩書は訪問時のものである）。

本研究は、2020年度東京経済大学個人助成研究費（研究番号 20-12）を受けた研究成果である。ここに記して深謝する。